

あいさつ

調布市教育委員会 教育長 大和田 正治

調布市立飛田給小学校におかれましては、令和元・2年度の2年間にわたり、調布市教育委員会研究推進校として、山中 ともえ 校長先生を中心に、精力的に研究を進めてこられました。また、これまでの間、市立学校におけるオリンピック・パラリンピック教育並びに特別支援教育の充実にも大きな貢献を果たされたことに心より感謝を申し上げます。

飛田給小学校では、多様な人とのかかわりのなかで自己理解と他者理解を相互に関連させることを通して、「障害の特性を知るとともに、障害のある人や様々な立場の人、一人一人への理解」を目指すとともに、「障害のある人や高齢の人など、自分とは違う様々な立場の人を自分とつながっている存在と捉え、ともに生きていこうとする態度」を育てるといった、本校独自の障害者理解教育の目標を設定し、障害者理解に資する全体計画を作成するなど、カリキュラム・マネジメントの実現を図ってこられました。

これらの研究の成果を生かし、次年度開催される予定である「東京2020オリンピック・パラリンピック」に向けた、障害の有無にかかわらず、ともに力を合わせて生活できる共生社会の実現をするための資質・能力を育成していくことは、先生方の今後のさらなる目標となるものであると考えております。

先生方には本研究を通して、自己研鑽を重ね、児童一人一人の学びを大切にするとともに、学校教育を通して児童が多様性を尊重し、互いを認め合える指導を進めていただきたいと思います。

今後とも、調布市の子どもたちのために、教育委員会と学校、保護者、地域、関係機関が情報共有に努め、より一層連携・協力しながら、調布の教育を推進してまいりたいと思います。これからも、先生方の頑張りに期待しております。

「多様性の尊重」を掲げて

調布市立飛田給小学校 校長 山中 ともえ

始めに、ここに調布市立教育委員会研究推進校として、2年間の研究をまとめることができましたことに対しまして、調布市教育委員会をはじめとし、独立行政法人特別支援教育研究所の方々、群馬大学教育学部教授霜田 浩信先生に深く感謝申し上げます。

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が平成24年に示され、特別支援教育は、更に推進されています。特別な配慮を必要とする児童のための指導内容や方法の研究、通級による指導の拡充、交流及び共同学習等、様々に進展しています。また、東京都でオリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることから、オリンピック・パラリンピック教育への取組としても様々な人々への理解を深めることが重要となってきました。

これまで、特別支援教育として、本校でも児童への対応の方法や授業の工夫、通級による指導との連携、校内体制の充実等に努めてきたところですが、「共生社会の形成」を目指すためには、配慮の必要な児童に対する支援の充実だけではなく、全児童が障害についての理解を深め、そこから「多様性の尊重」へと段階を踏むことが必要なのではないかと考えました。まだまだ、社会の中でも様々な差別や偏見が言われている中、このような研究を進めることが、障害の有無に関わらず、互いを思いやる社会を創り上げることに少しでも繋がっていくでしょう。

この研究の重要性は、誰しも理解するところではありますが、実際に2年間の研究として取り組もうとするとなかなか難しいものがありました。先ず、障害者理解教育の必要性については広く知られていることではありますが、先行研究はあまり多くはなく、単発的な交流事業や体験活動の方向はあるものの、系統的な参考となる取組が少なかったことです。また、教師自身が障害をどのように捉えて子供に伝えていくのか、人権上の配慮等と重ね合わせた戸惑い、更には、第1学年から第6学年までの発達段階を考慮した場合の教科や領域等との関連性や計画をどのようにすればよいのかという教育課程上の課題等、教科の指導方法等の研究とは異なる困難さがありました。この研究を進めている際に、コロナ禍に突入し、児童の意識調査に影響があったり、研究発表会が実施できなかつたりする想定外のこともありました。却って時間をかけてまとめることができました。

このテーマを研究として取り上げたことはかなりの挑戦であったと思いますが、本校の教職員一同模索しながら、手探りでここまでまとめました。障害者理解教育という文言についても他によい表現がなかったか、障害者理解を発達段階で捉えた場合の自己理解から始まり他者理解・障害者理解・国際理解という系統性はよかったのか、研究授業の内容としてどうだったのか、オリンピック・パラリンピック教育のレガシーとして今後も継続できるのか等、本校としても今後の課題があるとともに、ご意見をいただくこともあろうかと思えます。

中央教育審議会の答申『「令和の日本型学校教育の構築」を目指して』が示されたところであり、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」に向けて、学校は新たな段階に向かっていきます。その先にあるものが、多様性を尊重し合う社会であり、その社会を形成する人間を育成するために、この研究が参考となることを願っています。

第1部 研究の概要

I 研究主題について

1 研究主題

多様性を尊重し、互いを認め合える児童の育成
～オリンピック・パラリンピック教育を通じた障害者理解を軸として～

2 主題設定の理由

本校では開校以来の伝統として、校樹である“ゆずりはの木”にちなみ、「よいもの、正しいものを受け継ぎ、譲り渡していく心」、「人を敬い譲り合う心」を校風とし、「心ゆたかなたくましい子ども」の育成を教育目標としている。それを達成するための基本方針の一つに、「人を敬いゆずる心を大切にし、多様性を尊重する子どもの育成」を掲げ、人権教育やオリンピック・パラリンピック教育に取り組んできた。

東京都オリンピック・パラリンピック教育の育成すべき人間像として、「スポーツに親しみ、知・徳・体の調和のとれた人間」「多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間」の育成が目標とされている。重点的に育成すべき5つの資質のうち、特に、2018年度からは共生・共助社会の実現に向けて「ボランティアマインド」「障害者理解」「豊かな国際感覚」の育成が重視されている。また、東京都では「障害者理解」について、「障害の有無にかかわらず、ともに力を合わせて生活できる共生社会を実現するため、障害者理解の学習・体験や障害者との交流を通じ、多様性を尊重し、障害者を理解する心のバリアフリーを子供たちに浸透させる」としている。

本校学区域は、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の会場である東京スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザが隣接しており、児童は低学年の頃から地域探検、スポーツ観戦等で、それらの施設に親しんでいる。本校では、2016年度から障害のある方からの講話や障害のある方との交流、パラスポーツ体験などを通して、全学年で障害者理解の教育に取り組んできた。それらの活動を通して、障害に対する児童の意識は変わりつつあるが、自分を含め、人にはそれぞれ長所や短所があり、互いに認め合い支え合って生活することの大切さについての理解は十分ではない状況があった。そこで、自分と直接は関係しない人であっても、また、障害のある人であっても、相手の気持ちに寄り添い、行動できる児童を育成することを目標とした。

そのためには、低学年から自分のありのままを受け入れ自己を肯定する力、友達を始めとする身の回りの人々と触れ合い、理解する力を育てると同時に、障害者理解に関わる活動に系統性をもたせ、全教育活動を通して取り組む必要があると考えた。10年後、20年後の将来を見据え、互いの人権を尊重し、共に力を合わせて生活をする、共生社会の担い手を育むことを目指して本研究主題を設定した。

3 障害者理解教育の目標

- (1) 障害の特性や障害のある人の生き方を知るとともに、高齢者、外国人など様々な立場の人や自分を含めた周りの人、一人一人の理解を目指す。
- (2) 障害のある人や様々な立場の人に対して、自分とは関係がない存在、または支援してあげる存在と捉えるのではなく、自分とつながっている存在と捉え、共に生きていこうとする態度を育てる。

4 障害者理解の段階

先行文献（『始めよう！障害理解教育』水野智美）を基に、児童意識調査、体験活動の振り返りカードの記述などから、障害者理解教育の段階を本校では次のように考えた。

1段階 気付く

例：「本当に目が見えないんだ。」（児童の振り返りカードから）

2段階 知る

例：「点字を1年かけて覚えたと聞いてびっくりした。」（児童の振り返りカードから）

3段階 感じる

例：「障害があっても楽しめることはたくさんある。」（児童の振り返りカードから）

4段階 考え、行動する

例：「安心して横断歩道が渡れるように声をかけよう。」（児童の振り返りカードから）

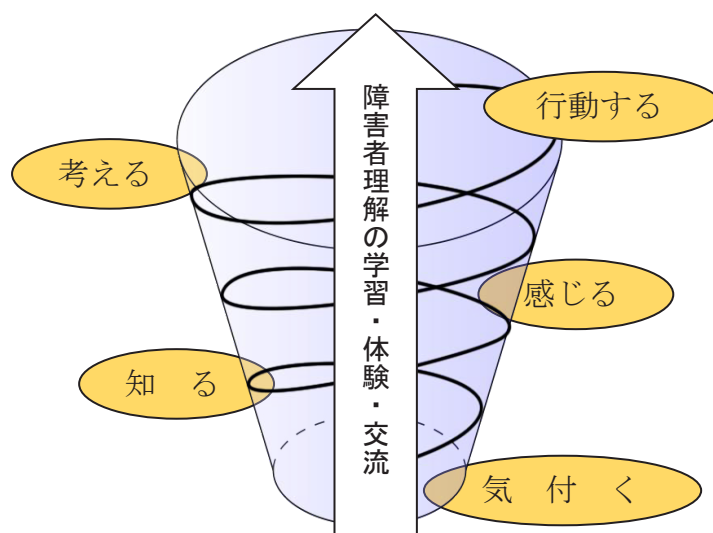


図1 障害者理解教育の段階

「2 知る」と「3 感じる」は、どちらが先ということではなく、並列の関係に近いと考えた。また、「考える」「行動する」は、日常の生活の場面で行われることが想定されるので、学校生活の場面では、「4 考え、行動する」とした。児童意識調査の中から記述で答える設問（「障害のある人との交流や体験から、どのようなことを思いましたか」）について、キーワードを拾い出した結果、1から4の段階は、障害者理解の学習や体験、交流を重ねることで進んでいくことが分かった。

II 目指す児童像

1 学校全体で目指す児童像

様々な立場の人の存在やその人の気持ちを自分事として捉え、行動できる子供

自分事として捉えるためには、状況を自分に関連付けることが大切と考える。そのためには問いや課題を見出せるように、教育活動全般において、例のような場合を想定し、児童の変容を注意深く見守りながら、適宜、児童への有効な声掛けや発問を工夫する必要がある。

- 例
- 自分が「様々な立場の人」になったら・・・
 - 自分の家族が「様々な立場の人」になったら・・・
 - 自分のクラスに「様々な立場の人」が転校してきたら・・・
 - 「様々な立場の人」と一緒に行動することになったら・・・
 - 「様々な立場の人」を道案内することになったら・・・
 - 飛田給の町の課題は・・・，飛田給の町をさらに良くするためには・・・
 - 大人になったら飛田給をどんな町にしたいか・・・

2 発達段階に応じた目指す児童像

低学年	・互いのよさや違いに気付き、みんなで助け合って活動できる子供
中学年	・障害について知り、自分にできることを考え、行動できる子供
高学年	・障害のある人や様々な立場の人の気持ちに寄り添って、主体的に行動できる子供

3 具体的な姿

- ・自己肯定感をもち、うまくいかないことがあっても次に頑張ろうとする。
- ・友達に対して、お互いの個性を認め、受容的な態度で接しようとする。
- ・障害のある人、高齢者、外国の人など、様々な立場の人の様子に気付いたり、困っていたら声を掛けようとしたりする。

III 研究仮説

- 自分の得意なことや苦手なことを知り、自分を肯定する力
 - 自分とは異なる環境や立場の人を認めていく力
- これらの力を教科横断的に、また、計画的に身に付けさせることで、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つのではないかと。

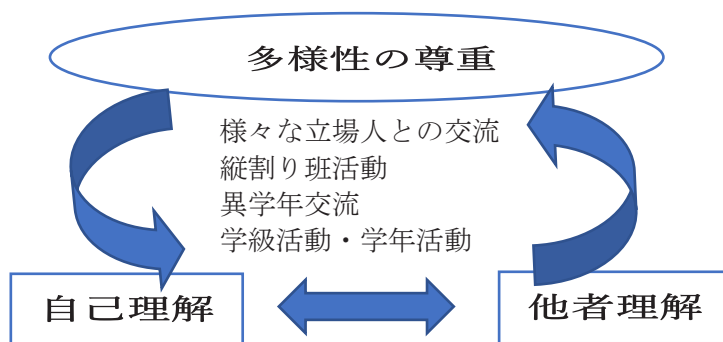


図2 研究の仮説

本校では、障害者理解とは、一人一人への人間理解と捉え、他者を理解するためには、まず、自分を理解することが大切であると考えた。自分の得意、不得意を知り、ありのままの自分を受け入れることで、社会における様々な立場の人は自分とつながっていること、それぞれに思いや考えがあるということを理解していくと考えた。本校では、地理的な要因からも東京都のオリンピック・パラリンピック教育の一環である事業を積極的に実施してきた。平成30年度パラリンピック競技応援校（車いすバスケットボール）、令和元年度パラリンピック競技応援校（車いすラグビー）、令和2年度文化プログラム等に指定され、連続して取り組んできた実績の上に立ち、さらに子供たちが、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つことを目指すことにした。

児童意識調査の結果を分析・集計をしたところ、図3-1のとおり、「自分にはよいところがあると思いますか」の問いに対して、「とても思う」「思う」と自分に対して肯定的に答えた児童は、「困っている人がいたら助けようと思いますか」の問いに66%の児童が「とても思う」を選んでいた。一方、図3-2のとおり、「あまり思わない」「思わない」と自分に対して否定的に答えた児童は、「困っている人がいたら助けようと思いますか」の問いに「とても思う」を選んだ児童は34%であった。この結果から、自己肯定感の高さは他者への理解や思いの深まりと関連があるのではないかと考えた。

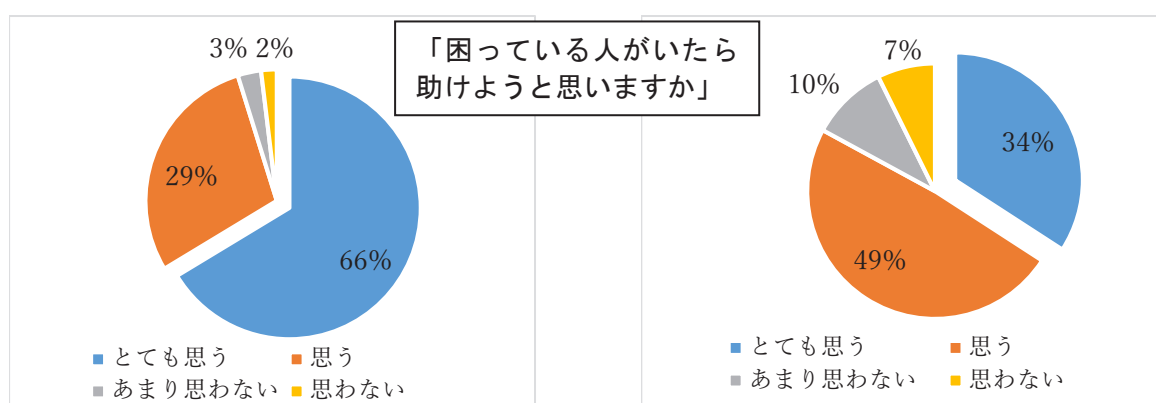
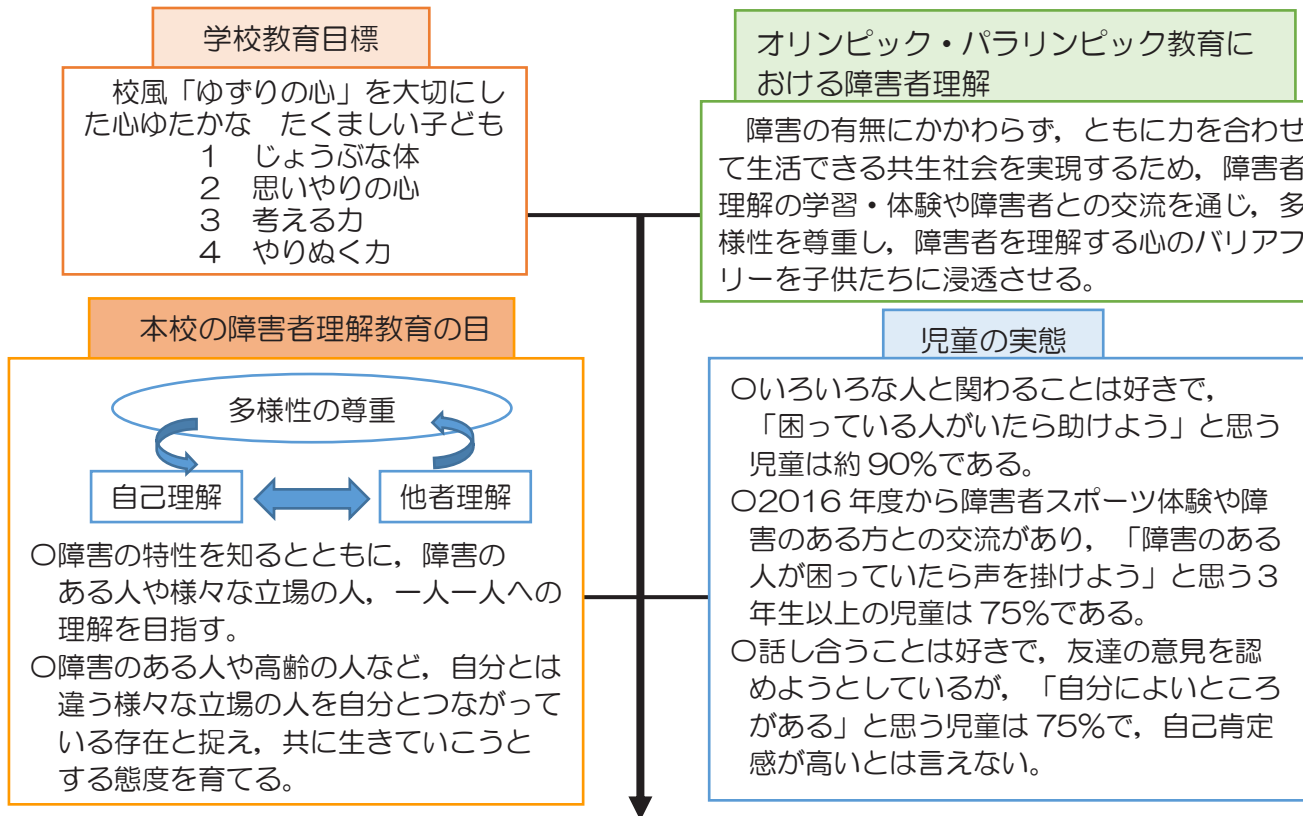


図3-1 「自分にはよいところがあると思う」児童の回答

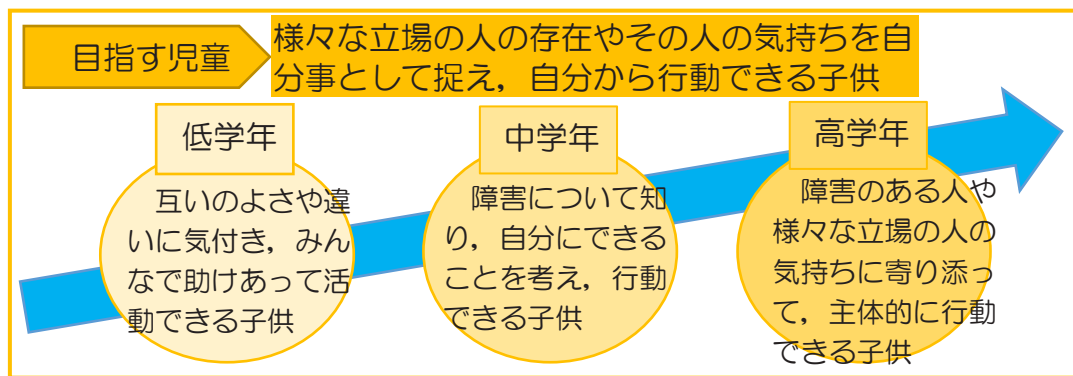
図3-2 「自分にはよいところがない」児童の回答

また、交流や体験をした直後は児童の中に様々な立場の人への理解が芽生えるが、活動のみで終わってしまうと相手に対する理解が浅かったり、時間の経過と共に活動に対する意識が低下していったりすることが振り返りカードや児童の発言から分かった。そこで自己理解、他者理解を深める学習や様々な体験に低学年から取り組んでいくこと、それらの活動や体験を教科横断的に関連させ、計画的に取り組むことで、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つのではないかと考えた。

IV 研究構造図



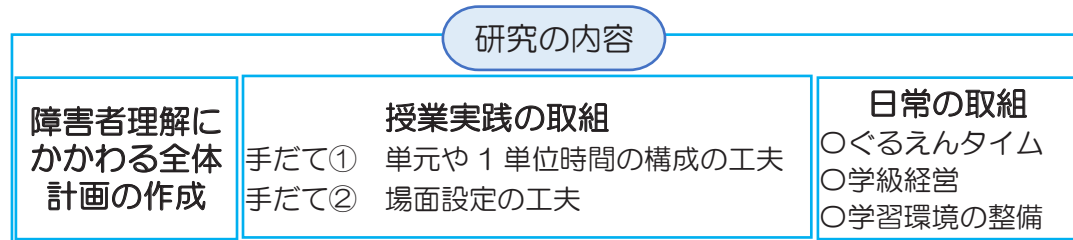
研究主題 「多様性を尊重し、互いを認め合える児童の育成」
～オリンピック・パラリンピック教育を通じた障害者理解を軸として～



研究仮説

- 自分の得意なことや苦手なことを知り、自分を肯定する
- 自分とは異なる環境や立場の人を認めていく

★これらの力を、教科横断的・計画的に身に付けることで、多様性を尊重し、互いを認め合える児童が育つのではないかと。



V 研究の経過

月	日	研究会	内 容	部会 研究収録関係
R元 5	29	講演会	「オリンピック・パラリンピック教育を通じての障害者理解について」 講師 群馬大学教育学部 霜田 浩信先生	・教員へのアンケート調査
6	26	研究授業	第4学年 総合的な学習の時間 「長生きしてね」 講師 国立特別支援教育総合研究所 伊藤 由美先生 宇野 宏之祐先生 杉浦 徹先生	・児童意識調査 ・研究の手だて ・学習指導案形式作成 ・障害者理解に関わる全体 計画作成 ・ぐるえんタイム検討
10	17	研究授業	第2学年 生活科 「あそびのたつ人 あつまれ」 講師 山中 ともえ校長	
11	26	研究授業	第5学年 総合的な学習の時間 「車いす利用者といっしょに楽しもう」 講師 国立特別支援教育総合研究所 久保山 茂樹先生	
R2 4	6	職員会議	・昨年度の研究の確認 ・飛小スタンダードについて	
5			休校	・ぐるえんタイム準備
6	24	全体会 分科会	・研究主題, 研究内容, 研究方法, 研究計画 確認, ぐるえんタイム ・目指す児童像	・研究の概要について ・国立特別支援教育総合研 究所の講師との顔合わせ
7	15	全体会 分科会	・分科会報告, 指導の手だて ・研究授業準備	
8	27	全体会 分科会	・2学期の研究計画 ・指導の手だて, 研究授業準備	・研究授業計画
9	23	全体会 分科会	・研究授業, 協議会のもち方 ・研究授業準備 ・意識調査1回目	・研究紀要プロット検討 ・意識調査分析
10	21	研究授業	第6学年 総合的な学習の時間 「つながろう 世界と日本! 日本と世界!」 講師 国立特別支援教育総合研究所 伊藤 由美先生 宇野 宏之祐先生 杉浦 徹先生	・協議会準備
11	18	研究授業	第1学年 生活科 「みんなのここにこ大きくせん」 講師 山中 ともえ校長 門田 英朗副校長	・障害者理解に関わる全体 計画修正
12	9	研究授業 (Zoomに よる協議 会)	第3学年 総合的な学習の時間 「だいすき飛田給」 講師 国立特別支援教育総合研究所 久保山 茂樹先生 宇野 宏之祐先生 平松 源志先生 ・意識調査2回目	・研究収録原稿確認
1	8	全体会 分科会	・研究収録原稿修正 ・分科会のまとめ	・収録原稿指導室提出
2	12	全体会	・研究の反省	・収録発注
3	3	全体会	・来年度の研究について	・研究収録完成, 発送

第2部 研究の内容

I 障害者理解教育に関わる全体計画

1 学校全体計画

(1) 各学年の取組の重点

障害者理解に関わる体験や交流に学校全体で取り組み、入学時から卒業まで学習を積み重ねていけるように、各学年で、授業や活動の中で取り組む重点を以下のように設定した。主に、生活科や総合的な学習の時間で取り上げることが多いが、教科横断的に関係する教科の内容や、特別活動や日常の生活指導の中でも意識して関連付けるようにした。

この各学年の取組の重点を学校全体で共通理解し、各学年の担任は1年生からの取組が、6年生までどのように積み重なっていくのかを見通して指導に当たった。

第1学年	自己理解
第2学年	他者理解
第3学年	地域
第4学年	福祉
第5学年	福祉と環境
第6学年	国際理解

(2) 学校全体の共通の取組と各学年の授業

学校全体の共通の取組としては、道徳地区公開講座、パラスポーツ競技応援校としての活動におけるパラスポーツ体験を柱とし、日常的には朝学習（ぐるえんタイム）の時間を使って、自己理解・他者理解・友達関係作りのミニエクササイズに取り組んだ。また、活動や体験は教科学習と教科横断的に関連させられるように、次のように、生活科・総合的な学習の時間を中心として、学年ごとに年間計画を立て、実践できるようにした。この中から、2年間にわたって学年ごとに授業研究を行った。

パラスポーツ競技応援校としての活動	道徳授業地区公開講座	第1学年	生活科：「高齢者との交流」	日常的な取組
		第2学年	生活科：「他者理解」	
		第3学年	総合的な学習の時間：「地域調べ」	
		第4学年	総合的な学習の時間：「障害者理解」	
		第5学年	総合的な学習の時間：「環境」	
		第6学年	総合的な学習の時間：「国際理解」	

2 障害者理解に関わる全校活動計画

(令和2年度)

学年	内容 重点	生活科 総合的な学習の時間	世界友達 プロジェクト	パラスポーツ 体験	文化的 事業
第1学年	自己理解	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 自分の得意, 不得意 学校探検(2年生との交流) ふれあい交流会(祖父母との交流) 	日本	ボッチャ	道徳授業地区公開講座 川端成道さんによるバイオリン演奏と講話 ＊プロのバイオリニストで視覚障害のある方の演奏とお話
第2学年	他者理解	<ul style="list-style-type: none"> 友達のよいところ 学校探検(1年生との交流) 地域めぐり 	スペイン	ボッチャ	
第3学年	地域	<ul style="list-style-type: none"> わたしたちの飛田給(地域) ゲストティーチャーによる講話(おはやし, 消防団, 宮ノ下図書館) 複籍交流 	ボツワナ共和国	車いすラグビー (令和元年度) 車いすバスケットボール (令和2年度)	
第4学年	福祉	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者(地域福祉センターとの交流, 認知症サポート) 視覚障害(点字体験, ダイアログ・イン・サイレンス) 聴覚障害(手話体験) 肢体不自由(車いす体験) ユニバーサルデザインの町作り 	アラブ首長国連邦	車いすラグビー パラ卓球 (令和元年度) 車いすバスケットボール (令和2年度)	
第5学年	福祉と環境	<ul style="list-style-type: none"> 知的障害(わかば事業所との交流) 障害のある人を取り巻く環境 	ウガンダ共和国	車いすラグビー (令和元年度) パラ陸上 (令和2年度)	
第6学年	国際理解	<ul style="list-style-type: none"> 留学生との交流 日本の紹介 	ベリーズ	車いすラグビー (令和元年度) パラ陸上 (令和2年度)	

3 各学年の年間計画

(1) 障害者理解教育 年間指導計画 第1学年

	1学期	2学期	3学期
生活科	<p>はじまりはじまりがっこうたんけん 2年生から学校の施設について教えてもらうことを通して、学校について知る。</p>	<p>ふれあい交流会 高齢者の方に喜んでもらえる内容を考え、交流を楽しむ。</p> <p>いっしょにいと あんしん 家族のことや自分でできることなどについて考える。</p>	<p>おおきくなったね1年間 自分自身が成長したことに気付く。</p>
各教科	<p>国語「みんなのなまえ」 友達の名前を知る。</p> <p>国語「みんなにはなそう」 自分の好きなものや好きなことを友達に伝える。</p> <p>音楽「うたでなかよしになろう」 「はくをかんじて リズムをうとう」 音楽を通してみんなで遊ぶ。</p>	<p>国語「たのしかったことをかこう」 自分の経験を振り返り、友達に伝える。</p> <p>図工「はこ かざるんるん」 友達と協力して作品を制作する。</p>	<p>国語「学校のことを つたえあおう」 学校で働く人に質問をする。</p> <p>音楽「おとをあわせてたのしもう」 友達と協力して合奏を楽しむ。</p>
	<p>体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。</p>		
道徳科	<p>なかよくね 友達の大切さについて考え、友達と仲良くしようとする。</p> <p>かぞくとおはなし 家族に対して敬愛の気持ちをもって交わろうとする。</p>	<p>はしのうえのおおかみ 相手の気持ちを考える。</p> <p>みんなじょうず 自分や友達のよいところをすんで見つけようとする。</p> <p>二わのことり 友達のことを思うとはどういうことか考える。</p>	<p>あしたは えんそく 誰にでも同じように接することの大切さについて考える。</p> <p>シートンと どうぶつたち 自分の特徴やよいところについて考える。</p>
特別活動	<p>学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。</p>		

(2) 障害者理解教育 年間指導計画 第2学年

	1学期	2学期	3学期
生活科	<p>学校探検 1年生に学校のことを説明しながら、関わり方について考える。</p>	<p>発見！町へとびだそう 地域の人々と接することで、生活をよりよくする活動をしている存在に気付くことができる。 町の中で見られる人にやさしい工夫に気づき、なぜそのようになっているかについて考える。</p> <p>あそびのたつ人あつまれ 誰もが楽しめるゲームを考えることで、他者理解の心を養う。</p>	<p>ひろがれわたしのものがたり 自己の成長を振り返り、支えられて生きてきたことを知り、感謝の気持ちを育む。</p>
各教科	<p>国語「みんなの前で話そう」 友達に自分の好きなことを伝える。</p> <p>国語「うれしくなる言葉」 言葉による気持ちの伝わり方について知る。</p> <p>音楽「うたでともだちのわをひろげよう」 歌を通して友達と仲よくする楽しさを知る。</p>	<p>国語「話し合ってみよう」 話し合い活動を通して、友達との意見の違いを知り、認め合う力を育てる。</p> <p>国語「心にのこったことをつたえあおう」 友達との感じ方の違いに気づき、よさを認め合う力を育てる。</p>	<p>音楽「音を合わせて楽しもう」 友達との表現の違いを楽しむ。</p> <p>算数「たし算とひき算」 習熟度別学習を取り入れ、クラスを超えて友達の意見や考え方の違いを認め合う。</p>
	<p>体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。</p>		
道徳科	<p>つのがついたかいじゅう 自分の行動の善悪に気づき、友達とよりよい関係を築こうとする。</p> <p>折り紙の名人 自分の得意なところやよいところを見付け、長所を大切にしようとする。</p> <p>かえってきたホタル 身近な自然に親しみ、動植物について優しい心で接しようとする。</p>	<p>およげない りすさん みんなと仲よくするためにできることを考える。</p> <p>どうしてうまくいかないのかな 自分のよいところや苦手なことを知り、友達にも同じように得手不得手があることを知る。</p>	<p>日本のお米、せかいのお米 お米調べから、他の国で作られたものや、伝えられていることについて知り、他国の文化に親しもうとする。</p> <p>よかったよ 友達と仲良くするにはどんな気持ちが大切なのかを考え、友達と仲良くしようとする。</p>
特別活動	<p>学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。</p>		

(3) 障害者理解教育 年間指導計画 第3学年

	1学期	2学期	3学期
総合的な学習の時間	大好き！飛田給 自分たちの生活をよりよくする活動をしている人に気付く。	大好き！飛田給 自分たちの生活をよりよくする活動をしている存在に気付く。 自分の未来を創造して、話を傾聴することで自己認識や他者認識を深める。	私たちの飛田給 自分たちの地域にあるバリアフリーに気付く。多様な人たちのために自分ができることを行う。
各教科	国語「だからものをしょうかいしよう」 友達と自分の宝物を紹介し合い、聞き合うことを通して、他者に興味をもつ。 社会「まちの様子」 学校の周りにおける公共施設について知る。 体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。 外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。	国語「わすれられないおくりもの」 国語「モチモチの木」 物語を通して、心のつながりについて考える。 体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。 外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。	国語「おにたのぼうし」 物語を通して、心のつながりについて考える。 社会「受け継がれる行事」 地域の行事を受け継ぐ
道徳科	たった一言 自分の行動の善悪に気付き、友達とよりよい関係を築こうとする。 友だち屋 本当の友達とはどんな人かを考え、友達を大切にしていこうとする。 「わたしらしさ」をのばすために 自分のよさや特徴に気付き、長所を大切にしようとする。 とくじーのおまじない 自分の生活を支えてくれている存在に気付き、感謝の気持ちをもとうとする。	水やり係 自分の考えを相手に伝える大切さに気付き、相手の思いを理解しようとする。 日曜日の公園で 自分と違う意見も大切にするために、どのようなことを心掛けるとよいか考え、実践しようとする。	みんながくらしやすい町 相手の置かれている状況を見て、自らすすんで親切にしようとする。 ありがとうの気持ちを込めて 自分たちの生活には支えてくれている人がいることに気付き、感謝の気持ちをもとうとする。
特別活動	学級活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

(4) 障害者理解教育 年間指導計画 第4学年

	1学期	2学期	3学期
総合的な学習の時間	長生きしてね 高齢者について理解し、自分にできることを考える。	障害ってなんだろう 聴覚障害、視覚障害、肢体不自由について知り、体験活動や交流活動を通して、それらの理解を深める。	みんな幸せ飛田給 ユニバーサルデザインの視点をもとに、これからの町づくりや自分たちにできることについて考える。
各教科	国語「メモの取り方を工夫して聞こう」 話し手が伝えたいことの内容を捉え、自分の考えをもつ。 社会「住みよいくらしをつくる」 地域の人々の協力と工夫の在り方について理解を深め、地域の一員として自分にできることを考える。	国語「1つの花」 登場人物の生き方や考え方・行動などを自分と比べる。 国語「新スポーツを考えよう」 互いの意見の共通点や相違点に着目して話し合い、他者理解を深める。 理科「わたしたちの体と運動」 自分の体の曲がる部分を調べる活動を通して、自己理解を深める。	国語「身の回りの便利なものを考えよう」 道具や設備を通して、社会ではたくさんの人がそれぞれ違った立場で暮らしていることを理解し、「便利」について考える。 社会「世界とつながる大田区」 都民の一人として地域の外国人と共に生活していくために自分たちができることを考える。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。		
	外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
道徳科	世界に一つだけの花 自分の長所を伸ばしていこうとする。 思いやりって 相手の気持ちを察し、行動しようとする。 ひとりぼっちのYちゃん 誰に対しても公平に接しようとする。 学級会での出来事 一人一人、考え方が違うことに気づき、それぞれの考えを大切にしようとする。	ちょっと待ってよ 誰に対しても分け隔てなく行動しようとする。 見えない障害に気付くこと 見た目には分かりにくくても困っている人がいることを知り、相手の立場や状況を想像して接しようとする。 わたしの大切なもの 自国と他国の文化の共通点や相違点を理解、尊重しようとする。 より遠くへ パラリンピックに出場した谷さんの生き方を通して、目標に向かって粘り強く取り組もうとする。	みんなちがってみんないい 自分らしさとは何か、それを生かすためにできることは何かを考える。
特別活動	学級活動 児童会活動（代表委員会） クラブ活動 縦割り活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

(5) 障害者理解教育 年間指導計画 第5学年

	1学期	2学期	3学期
総合的な学習の時間	共に生きる私たち 知的障害について学習し、交流する方法を考え理解を深める。	パラスポーツ体験 パラスポーツ体験を通して、パラリンピックに興味をもち、障害について理解を深める。	共に生きる私たち～パラスポーツを調べよう～ パラリンピックについて調べることで、様々な障害についての理解を深める。
各教科	社会「未来を支える食料生産」 米作りや水産業などの食料を生産する人々について知り、感謝の気持ちをもつ。	国語「大造じいさんとがん」 登場人物の生き方や考え方、行動などを自分と比べる。 国語「AIとの暮らし」 ミニディベートを通して自分と友達の考え方の違いを発見し、他者理解を深める。 国語「世界遺産白神山地からの提言」 意見文を書く活動を通して、自分と友達との意見の違いに気付いたり、互いに認め合ったりする。 社会「未来をつくり出す工業生産」 企業の社会貢献や工業生産を支える人々の努力について理解を深めるとともに、感謝の気持ちをもつ。	社会「国土の自然とともに生きる」 自然環境を守るためには、様々な人との協力が不可欠だということを理解し、自己の生活の在り方について考える。
	体育 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。		
	外国語活動 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。		
道徳科	すれちがい 広い心で相手の意見や立場を尊重していこうとする。 道案内 相手の立場に立って物事を捉えようとする。	「同じでちがう」 同じ命の重さをもつ人間として尊重し合い、それぞれの命を大切にしていこうとする。 「自分らしさ」を見つめよう 短所を改め長所を伸ばしていこうとする。 ブランコ乗りとピエロ 広い心で相手の思いや立場も尊重しようとする。 だれもが幸せになれる社会を 誰に対しても差別や偏見をもつことなく、公平・公正な態度で接し、正義の実現に努めようとする。 小さな国際親善大使 相互に尊重し合いながら、国際親善に努めようとする。	マークが伝えるもの 誰もが過ごしやすいようにするために工夫されているものについて知り、共生の意識を深める。 世界最強の車いすテニスプレーヤー 国枝慎吾 目標をもち、困難があってもくじけずに努力しようとする。
特別活動	学級活動 児童会活動 クラブ活動 縦割りの活動 学校行事 各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。		

(6) 障害者理解教育 年間指導計画 第6学年

	1学期	2学期	3学期
総合的な学習の時間	みんなのために避難所を開設しよう 誰もが利用しやすい避難所を開設するために必要なことを考える。	つながろう 世界と日本！日本と世界！ いろいろな国から来日する人たちの思いに寄り添いながら、自国の良さや問題点を知り、文化や価値観に気づき、互いに認め合いつながり合おうとする。	ゆずりの心 de 未来へ Go! 自分の得意なこと、好きなことを振り返り、将来の自分のことについて考える活動を通して自己理解を深める。
各教科	社会「すべての人が幸せに生きるために」 基本的人権について知り、尊重しようとする意識をもつ。	国語「地域の防災について話し合おう」 「パネルディスカッション」 意見の違いを大事にしながらか話し合い、考えを深める。	社会「日本とつながりの深い国々」「世界の人々とともに生きる」 国際理解を深めるとともに、他国の人々との関わり方や、共生社会の在り方についての理解を深める。
	<p>【体育】 自己の課題を見付け、友達に伝える。誰とでも仲よく運動したり、友達の考えを認めたりする。</p> <p>【外国語活動】 言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。</p>		
道徳科	世界人権宣言から学ぼう みんな、おかしいよ！ 共生の考えを大切にしようとする。	「クメール絨」の復興を目指して 五十五年目の恩返し 国際理解を深めるとともに、共生社会の担い手としての自覚をもつ。	エルトゥール号ー友好の始まり 国際理解の考えを深めるとともに、共生社会の担い手としての責任感をもつ。 【最後のおくり物】 思いやりの気持ちをもとうとする。 【ぼくの名前呼んで】 共生の考えを大切にしようとする。 【「ありがとう」の気持ちを伝える】 感謝の気持ちを伝えることの大切さを知り、伝えようとする。
特別活動	<p>【学級活動】 【児童会活動】 【クラブ活動】 【縦割りの活動】 【学校行事】</p> <p>各活動を通して、自分の得意なことを伸ばしたり、苦手なことを克服したりしながら自己理解を深めるとともに、友達や他学年の人との関わりを通して、他者理解・相互理解を深める。</p>		

4 授業研究

研究の視点

(1) 自己理解 (2) 他者理解

自己理解の深まりとは	他者理解の深まりとは
<ul style="list-style-type: none"> 得意なことや自分のよさに気付く。 不得意なことやできないことを認める。 自分の考えと友達の考えの相違に気付く。 自分の考えの変化に気付く。 自分の成長を実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の意見を理解しようとする。 友達の意見のよさに気付く。 友達の意見を認める。 相手の思いや考えに気付く。 相手の状況を自分事として捉える。

指導の手だて

- (1) 自分の物の見方・考え方に目を向け、「変わった・広がった・深まった」という経験や過程を重ねていくための単元及び1単位時間の構成の工夫
- (2) 多様な人々との関わりの中で、相手を知り、活動や感情を共有するための場面設定の工夫

授業における具体的な工夫

- 興味、関心や課題意識をもつことができるように単元構成をする。
- 自分の考えを書いたり、発表したりする活動を取り入れる。
- ねらいを明らかにして、話し合い活動や協働学習を設定する。
- 意見の違いを掘り下げるといった発問を工夫する。
- 地域の人材を活用し、交流する機会をもつ。
- 学習の積み重ねや自分の考えの変化が分かるような振り返りカードを工夫する。
- 児童の意見を価値付けし、全体にフィードバックする。

授業研究の実際

- 令和元年6月26日 第4学年 総合的な学習の時間「長生きしてね」
本時の目標：目的意識や相手意識を明確にし、調べたことを基に自分たちが伝えたいことを考える。
- 令和元年10月17日 第2学年 生活科「あそびのたつ人 あつまれ」
本時の目標：
 - 相手や目的に応じて、伝えたいことを表現しようとするようにする。
 - 多様な手段の中から、相手や目的に応じた伝え方を選んだり、活用したりできるようにする。
 - 遊びの約束やルールなどを考え、遊びをつくり出そうとすることができる。
- 令和元年11月26日 第5学年 総合的な学習の時間「車いす利用者といっしょに楽しもう」
本時の目標：地域のために行われている活動や地域施設について、まとめたことや考えを共有し合い、自分たちにできることを考える。
- 令和2年10月21日 第6学年 総合的な学習の時間「つながろう 世界と日本！日本と世界！」
本時の目標：
 - 世界には多様な文化や習慣があることや、来日するいろいろな国の人たちの思いを理解している。
 - 集めた情報を、目的を明確にし、相手意識をもって整理・分析している。
- 令和2年11月18日 第1学年 生活科「みんなのこにこ大きくせん」
本時の目標：祖父母との交流を振り返り、気付いたことや分かったことを表現したり伝え合ったりすることで、自分の役割が増えたことに気付くことができる。
- 令和2年12月6日 第3学年 総合的な学習の時間「だいすき飛田給」
本時の目標：地域のために行われている活動や地域施設について、まとめたことや考えを共有し合い、自分たちにできることを考える。

II 日常の取組

1 ぐるえんタイム

自己理解、他者理解、友達との関わりを深める活動を月に2回、朝学習の時間に全校で取り組んだ。始めに活動のめあてや約束を伝え、最後には振り返りを行う。

(1) ミニエクササイズ

構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングを活用し、学年の初期、中期、学年末を考慮してゲームの内容を選択した。

(*内容については次ページ参照)



(2) ぐるえん劇場

教員へアンケートを取り、友達への関わり方で改善させたいことをテーマにして、数分の動画を作成した。本校の校内通級教室の教員が略案を作成し、全担任が動画を基にクラスで話し合い活動を進めた。「こうすればよかったんじゃないかな。」等の気付きは、掲示板に貼り、児童にフィードバックした。

(3) 図書の活用

参考図書『友達関係』シリーズを基にスライドを作って提示したり、それぞれの学習に合わせて障害理解に関わる本の読み聞かせを行ったりした。



(4) NHK Eテレ『u&i』の視聴

「感じ方の違い」「読み書きの苦手」「身体障害者への関わり」「外国人児童」などから、学級の実態に合わせてテーマを選んだ。

*ぐるえんタイム活動計画

日付	題材名	ねらい	内容	参照
6/5	自己紹介ゲーム	友達の名前や好きなものを知ること、親近感をもつことができる。	グループを作り、テーマに対して1人ずつ発表し、2人目以降は前の人の発表も付け加えていく。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p13,14
6/19	図書「友達関係(不安ダヨ星人・イライラ星人)」	不安や怒りの気持ちの特徴やそれらの気持ちの対処方法を知る。	スライドショーから、不安な気持ちや怒りの気持ちの特徴を確認し、対処方法を学ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
7/3	質問じゃんけん	相手に伝えることの楽しさや自分を受け入れてもらう心地よさを実感する。	近くの人とじゃんけんをして勝った人が負けた人に一つ質問をする。	「小学校人間関係づくり～エクササイズ&ワークシート～」(学事出版) p40-45
7/17	ぐるえん劇場①	相手の気持ちを考える。	遊びに誘われたときに何気なく「むり」と言って断る場面劇を見て、言われた相手の気持ちを考え、日々の自分の行いに照らして振り返る。	
8/4	うれしかった「ありがとう！」	友達がしてくれたことで嬉しかったことを「ありがとう！」カードに書き、相手にプレゼントすることで、感謝の気持ちを表す。	友達にしてもらって嬉しかったことをカードに書き相手に渡す。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p128,129
8/28	4つの窓	自分と同じ好みや違う好みをもつ友達の存在を知り、互いの理解を深める。	4つのお題に対して自分に最も当てはまるものを選び、選んだ理由を添えてグループの友達と意見を交流する。	「小学校人間関係づくり～エクササイズ&ワークシート～」(学事出版) p112-116
9/4	図書「友達関係(自分大好き大作戦)」	自分自身の肯定的な受け取り方を知る。	スライドショーを見て、失敗したり、自分がかめだと思ったりしたときの受け取り方を学ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
9/11	ぐるえん劇場②	相手の様子によって話をやめたり、話す内容を考えたりできるようにする。	相手の反応を気にせずに自分の好きなものを見せ続けようとする場面劇から、相手の気持ちを考え、日々の自分の行いと照らして振り返る。	
10/2	ご注文はどっち?	自分を肯定するきっかけにする。	2つの選択肢からどちらかを選び、選んだ理由を添えてグループやクラス全体で意見を交流する。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p56,57
10/9	ぐるえん劇場③	友達に注意されたときは、一度自分の言動を振り返ることができるようにする。	注意されたときに自分の行動を顧みず、注意した相手に言い返す場面劇から、相手の気持ちを考え、日々の自分の行いと照らして振り返る。	
11/6	電池人間	他者と仲良くなかかわり活動できるようにする。	お手玉を頭上に乗せて自由に動き回り、お手玉が落ちたら、近くの人に拾って頭上に乗せてもらう。	
11/20	u&i①	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School 「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School 「u&i」
12/11	いいねコール	テーマに対しての自分の考えと友達の考えを比べ、友達のそれぞれの感じ方、考え方を聞き合う。	お題に対して自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりする。発表を聞いて、どのような意見でも「いいね」とコールする。	
12/18	u&i②	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School 「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School 「u&i」
1/15	WANTED=この人を探せ	あまり話をしたことがない友達のことを知り、お互いの親近感を深める。	お題に合う人の名前を書き、クラス全員で答え合わせをして、お題に当てはまる人を知る。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p94,95
1/29	u&i③	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	NHK for School 「u&i」のサイトからクラスの実態に合わせて動画を選び視聴する。	NHK for School 「u&i」
2/12	でーきたできた	グループやクラスでできるようになったことを認め合い、互いの頑張りやよさを確かめる。	グループやクラス全体でできるようになったことを発表し、共有する。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ56選」(明治図書) p108,109
2/26	図書読み聞かせ	多様性を尊重し"みんな"で助け合える心情を育てる。	図書は図書室の多様性のコーナーか友達関係の図書等から担任がクラスの実態に合わせて内容を選ぶ。	「学校では教えてくれない大切なこと友達関係～自分と仲良く～」(旺文社)
3/12	いいところ探し	互いのよさを認め合う。	友達のいいところだと思う事実と感想をカードに書き、相手に渡す。	「構成的グループエンカウンターミニエクササイズ50選」(明治図書) p28,29

2 学級経営

教師が児童理解に努めると共に、互いを認め合う学級経営を心掛ける。

- ・児童の活動に対して、結果だけでなく過程を認められるように児童の変容を見取り、価値付けたり、全体に広めたりする。
- ・否定的な叱り方をせず、本人に見通しがつくような声掛けをする。
- ・支援の必要な児童に対して、自分は受け入れられているという気持ちをもてるような関わり方をする。
- ・帰りの会などを利用して、よかったこと、友達のいい所探しなどをする。
- ・休み時間にはクラス遊びを取り入れ、友達と関わる楽しさを味わえるようにする。

3 学習環境

様々な子供が学びやすいように、ユニバーサルな学習環境を整える。

- (1) 教室前面は学習規律に必要な掲示物（教育目標、今週の目標、生活時程表、声の大きさ・話し方・聞き方）に揃え棚は目張りをする。水槽などの注意を引きやすい物は置かないようにする。



- (2) 色の見え方に配慮し、黒板に書くチョークの文字の色は基本的に白と黄色にする。
- (3) 学習の方法（飛小スタンダード）を統一し、担任が変わっても、児童が混乱しないようにする。

① ノートの取り方（各教科共通）

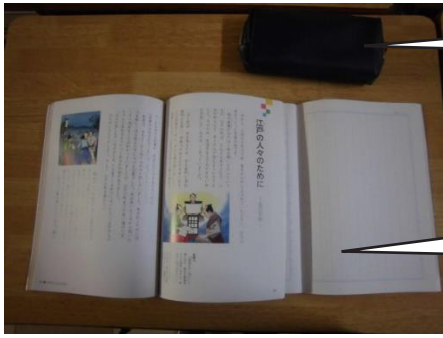
- ・日付（ページ）を書く。 ・見開きで使う。
- ・学習のめあて、まとめ、振り返りを書く。
- ・めあては鉛筆で囲む。 ・まとめは赤鉛筆で囲む。

② 板書の仕方

- ・めあて まとめ 振り返り を分かるようにする。（マグネット活用）
- ・めあては白線で囲む。 ・まとめは黄線で囲む。

③ 児童の机上

- ・その時間に使う物以外は、机の中にしまう。
- ・教科書、ノートが見やすいように机上の使い方を習慣化する。



筆箱は一番上に

教科書と、空いている側のノートを重ねる。

4 校内の特別支援部との連携

校務分掌の一つである特別支援部が中心となって全体会を開いている。配慮が必要な児童や児童への対応に対する情報共有、実践例の紹介を行っている。

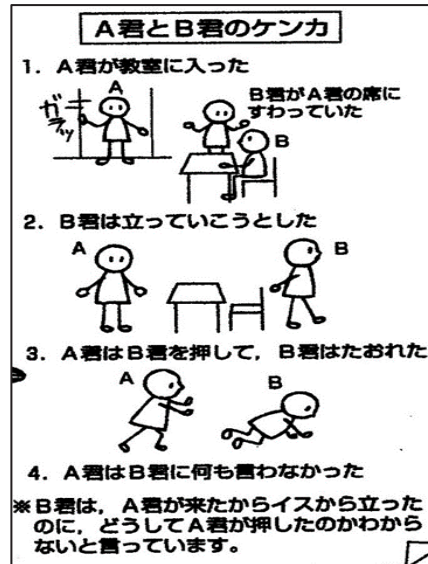
例1) 児童の言動でイラっとすること、対応で困っていること

- ・「えー」「最悪」「やりたくない」嫌そうな顔・何度も机をたたくなどのマイナスの言動について
- ・素直に謝ることができない子に対して
- ・友達とトラブルがあった際の状況を尋ねると、嘘を言っているようには見えないが、相手や周囲で見ていた児童の話と異なるとき

* 特別支援部で作成した教材

図で示す「ビデオ巻き戻しタイム」

- ① 出来事を図にする。
- ② お互いの気持ちを赤ペンで記入する。
- ③ ケンカをふせぐにはどうしたらよかったかを青ペンで行動を修正する。



- ・何秒か前に説明したと同じことを聞かれたとき
- ・自己肯定感が低い子に対して

例2) 学級経営・授業の中で工夫していること

- ・みんなの前で褒める。
- ・小さな頑張りを見逃さないようにする。
- ・あったかい言葉をなるべく取り入れた言葉遣い+ジェスチャーもあわせて伝える。

「ありがとう」「助かる」「すごい」「ナイス」など

- ・自分の表情（笑顔）を豊かにすること。
- ・よい言動をクラス全体に伝えると、自分から言動を正す児童が増えた。
- ・注意するときに、あえて個人名を出さないようにする。

→自分の行動を振り返り、自分で何がいけなかったかに目がいき、自分で気付いてできるようになる児童が増えた。

- ・教室がざわついている際、しばらく黙っている。 →誰かが気付いて声を掛け合って静かになった。
- ・トラブルが起こった際は、互いの言い分をしっかりと聞き、互いに分からせるようにする。

例3) 指導方法の紹介

トラブルが起こったとき、お互いの気持ちを可視化し、望ましい行動を考えさせるための工夫

Ⅲ 体験・交流活動（令和元年度・2年度）

1 パラスポーツ体験

(1) ボッチャ（1，2年生）



講師：秋元 妙美さん
（元パラリンピックボッチャ日本代表選手）・
調布市スポーツ専門委員の方々

(2) パラ卓球（4年生）



講師：吉田 信一さん（元パラリンピック卓球日本代表選手）

(3) 車いすラグビー（3～6年生）



講師：峰島 靖さん（日本車いすラグビー連盟）・羽賀 理之さん（リオパラリンピック日本代表）・乗松 隆由さん（WWRC 日本代表）

(4) 車いすバスケット世界大会 3年生:歓迎セレモニー出席 5年生:日本代表強化試合観戦



（平成30年度）

6年生全員で、応援の旗を作りました。日本の代表として戦ってほしいという願いを込めて、デザインも考えました。

2 道徳授業地区公開講座

(1) 令和元年度 道徳授業地区公開講座「自分らしく生きる」



講師：石井 康二さん

(車いすソフトボール元日本代表
キャプテン)

(2) 令和2年度 道徳授業地区公開講座 バイオリンの演奏及び講話



講師：川島 成道さん (バイオリニスト)

3 生活科・総合的な学習の時間の取組

(1) 「ふれあい交流会」(1年生)



(2) 「学校探検」(2年生)



(3) 「大すき！飛田給」(3年生)

講師：飛田給はやし連，消防団，郵便局の方々



(4) 「車いす体験」(4年生)

講師：高江洲 幸男さん (市内在住)



(5) 「ダイアログ・イン・サイレンス」体験プログラム（4年生） 音のない世界を体験する

講師：ダイアログ・ジャパン・ソサエティ スタッフ 4名



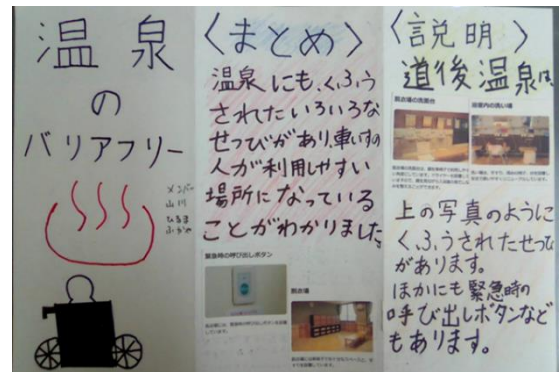
(6) 点字体験・手話体験（4年生） 講師：調布市社会福祉協議会の方々



(7) 「車いす利用者と一緒に楽しもう」（5年生）



児童作成リーフレット



(8) 「つながろう 世界と日本！」（6年生）

講師：本校 AET，留学生の方々



第3部 　　まとめ

I 児童の変容

1 意識調査の分析

研究1年目の6月に、児童の実態を知るとともに研究の方向性と手だてを探るため、児童への意識調査を行った。図4-1から図4-6では、低・中・高学年ごとに集計した結果を比較した。

(1) 令和元年度児童意識調査の分析と考察（令和元年6月実施）

設問1「いろいろな人と関わることは好きですか。」

図4-1から、学校全体で「とても思う・思う」と答えた児童が83%である。人と関わることを好きと感じている児童が8割を超えているということは、本校の児童のよさであるといえる。今後人も人と関わる楽しさを感じられるような活動を取り入れたり、人との関わりが円滑ではない児童には意識的に担任からの声掛けを工夫したりしたい。

設問2「困っている人がいたら助けようと思いますか。」

図4-2から、学校全体で90%の児童が「とても思う・思う」と答えている。学年が上がるにつれて、その割合が高くなっているのは、日常の教育活動の成果と思われる。ただ、「とても思う」と答えた児童は低学年で60%に対して、中・高学年では38%なので、学年が上がるにつれて、思っただけでは行動には移すことができていない場合があるのではないかと推測される。自分で考えて行動できる力を育てていきたい。

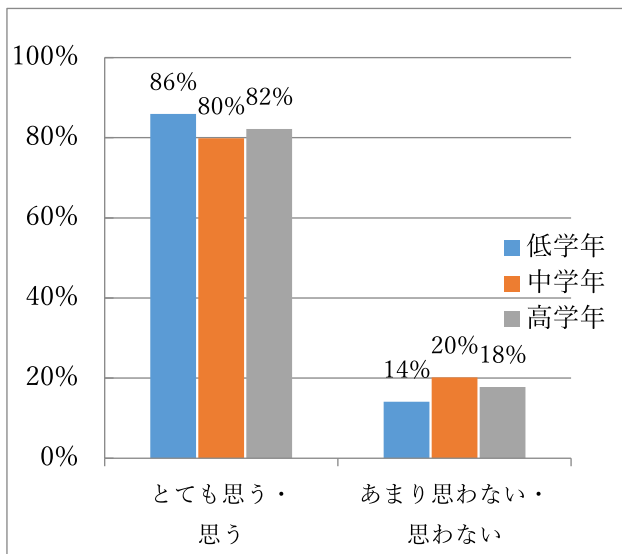


図4-1 いろいろな人と関わることは好きですか

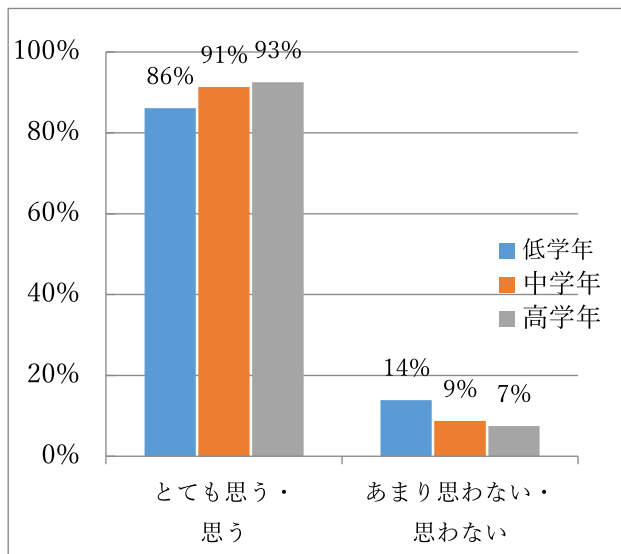


図4-2 困っている人がいたら助けようと思いますか

設問3「自分にはよいところがあると思いますか。」

学校全体で「とても思う・思う」と答えた児童が69%である。図4-3のとおり、低学年は7割を超えているが、中学年、高学年と上がるにつれて、低くなっている。自分のよさというのは人と比較することではなく、人それぞれであるという見方・考え方を育てていきたい。また、学年が上がるにつれて、学習や友達との関わりにおいて、できないことや失敗も増えていくと思われるが、児童一人一人の見取りを通して頑張った過程を認めたり、できなかったことができるようになった実感をもてるような指導の工夫をしたりして、自己肯定感を高めていきたい。

設問4「人のことを考えて行動していますか。」

図4-4から、学校全体で「とても思う・思う」と答えた児童が74%である。約3割の児童が「あまり思わない・思わない」ということは、結果としてトラブルにつながったり、失敗体験につながっていたりしているのではないかと考えられる。学習や生活のルールを明確にして、誰もが過ごしやすい学級作りを行いたい。

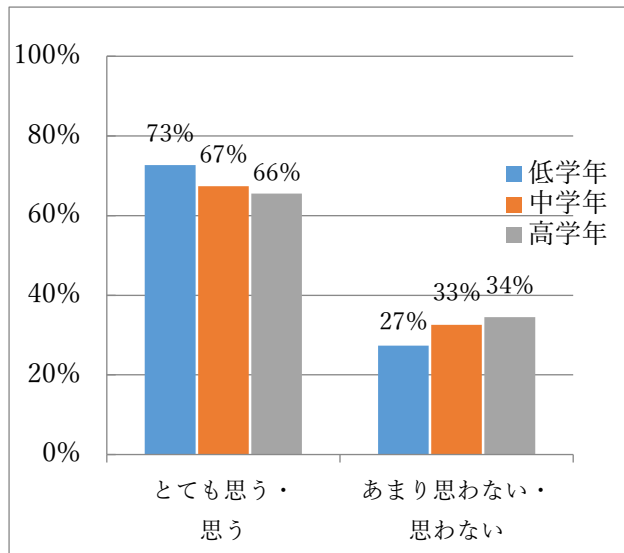


図4-3 自分にはよいところがあると思いますか

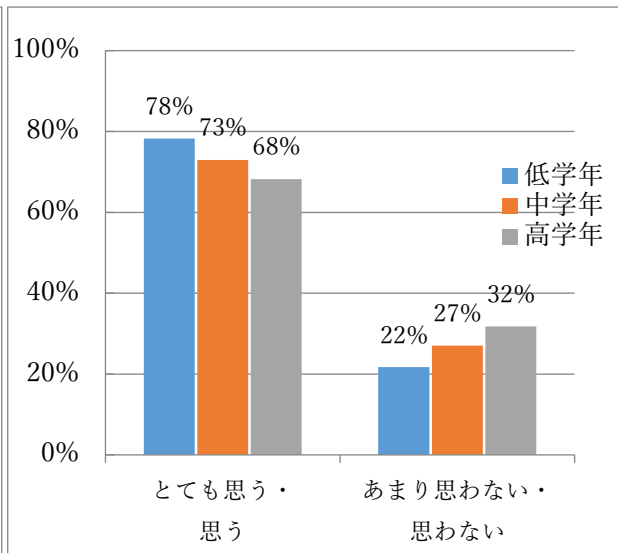


図4-4 人のことを考えて行動していますか

設問5「友達と考えが違った時、友達の見解も認めることができますか。」

図4-5から、中・高学年で88%の児童が「とても思う・思う」と答えている。自分と友達の違いに気づき、友達によさに目を向けさせる指導を一層充実させたい。また、設問3と関連して、自分が発表するより、人の発表を聞いている方が安心と感じていることの裏返しとも考えられるので、自分なりの考えをもたせるような指導の工夫もしていきたい。

設問6「障害のある人が困っていたら、声をかけようと思いますか。」

図4-6から、中・高学年で75%の児童が「とても思う・思う」と答えている。これまで、障害者に関わりのある様々な活動を取り入れてきた成果と思われる。声を掛けようと思う理由として、「困っている時はお互いさまと思うから」と答えた児童が46%と最も多く「障害のある人との関わり方を知っているから」と答えた児童は8%であった。関わり方を知っている、知らないに関わらず、他者へ思いを馳せることができることが大切だと考えられる。

一方、「あまり思わない、思わない」と答えた児童の理由として、「どのように声を掛けていいかわからないから」が61%と最も多かった。相手の様子を見ながら適切な関わり方ができるような指導が必要であるとする。一方、「知らない人だから」「自分とは関係ないから」と答えた児童が合わせて25%ということは、自分とは関係ない人には無関心であるということが分かる。自分たちが暮らす社会には様々な人がいて、互いに尊重し、支え合うことが大切だという気持ちを育てていきたい。

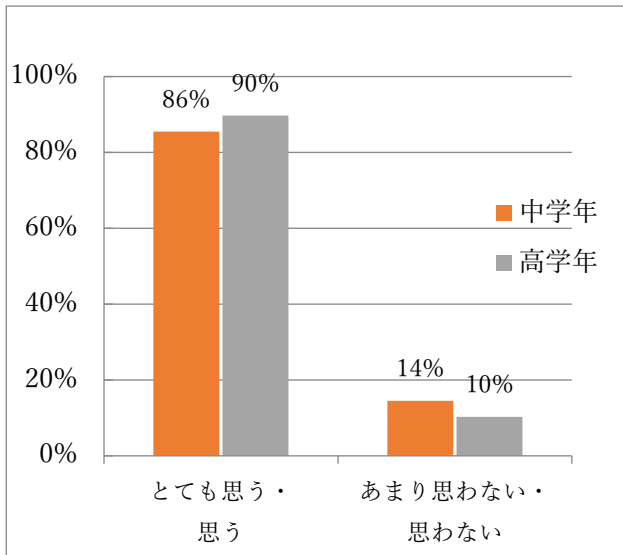


図4-5 友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか

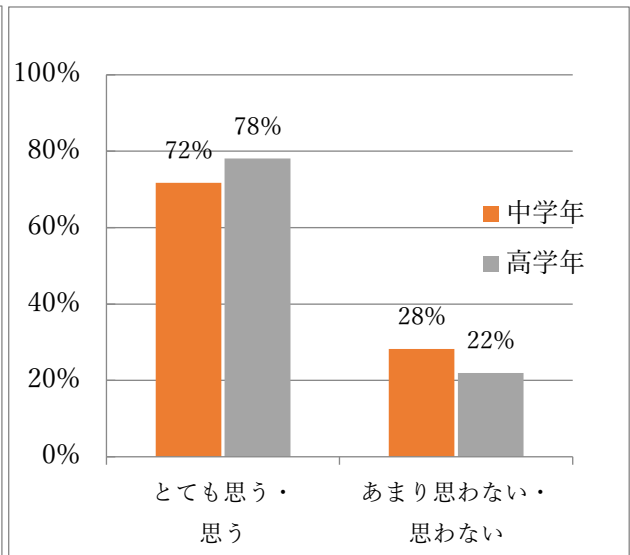


図4-6 障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか

(2) 2年間の児童意識調査の分析と考察

研究2年間のまとめとして、全校児童の変容を見るための意識調査の結果は、図5-1から図5-6に示したとおりであり、以下のように分析と考察を行った。

設問1「いろいろな人と関わることは好きですか。」

様々な人と関わろうとすることは、多様性の尊重の基本と考える。図5-1のとおり、1年目の最初の調査と比べて、2年目の最後の調査では、「とても思う・思う」と答えた児童が2.6ポイント増えて85%となった。誰もが安心して過ごせる学級経営を心掛けてきたこと、自己理解、他者理解、友達との関わりを深める「ぐるえんタイム」を通年で行ったことなどの成果が表れたと考える。

設問2「困っている人がいたら助けようと思いますか。」

図5-2のとおり、大きな変容は数値では表れなかったが、9割近くの児童が「とても思う・思う」と答えた。未来を担う者として頼もしい結果であり、身近なところから実践できるように今後とも支援していきたい。

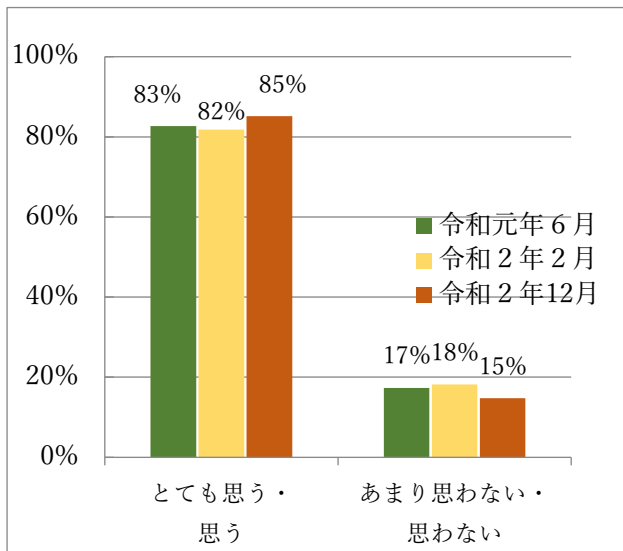


図5-1 いろいろな人と関わることは好きですか

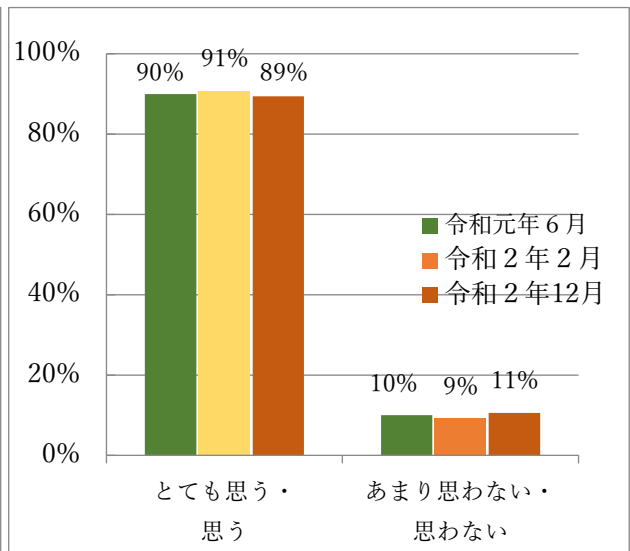


図5-2 困っている人がいたら助けようと思いますか

設問3 「自分にはよいところがあると思いますか。」

図5-3のとおり、1年目の最初の調査結果より、ポイントが下がる結果となったが、低学年ほど自己を肯定的に受け止める傾向があったことから、自分を客観的に見つめる目が育ってきたのではないかと捉えている。

理由記述を分析したところ、「とても思う・思う」と答えた児童で、多かった記述が「家の人や友達に褒められるから」「誰にも良い所があると思うから」「〇〇が得意だから」「がんばっているから」等であった。低学年から中学年にかけては、家族や友達など他者からの評価が大きく関係していることが分かった。また、設問4「人のことを考えて行動していますか。」に対しても高い評価をしていることから、友達や周りの人との良好な関わりも関係していると考えられる。

一方、「あまり思わない・思わない」と答えた児童の理由は「得意なことやできないことがないから」「ダメなところがあるから」「自分では分からないから」「怒られるから」等であった。高学年になるにつれ、学習や運動能力に対する周囲との比較を通して、自分を客観的に捉え、自己評価しているのではないかと考えられる。

また、自己肯定感の高い児童は自分のよい所もよくない所も合わせて受け止めていること、自己肯定感の低い児童は自分のよくないところばかり気にしてしまい、自分を多面的に見ることができていないという傾向が分かった。

設問4 「人のことを考えて行動していますか。」

図5-4のとおり、設問3と同様、下がる結果となった。学年別に見ると、高学年になるほど割合が低いことから、授業の最後の振り返りの活動の積み重ねにより、児童が自分自身や周りの人に目を向けるようになり、様々なことに気付いたり考えたりするようになってきたための結果と考えられる。

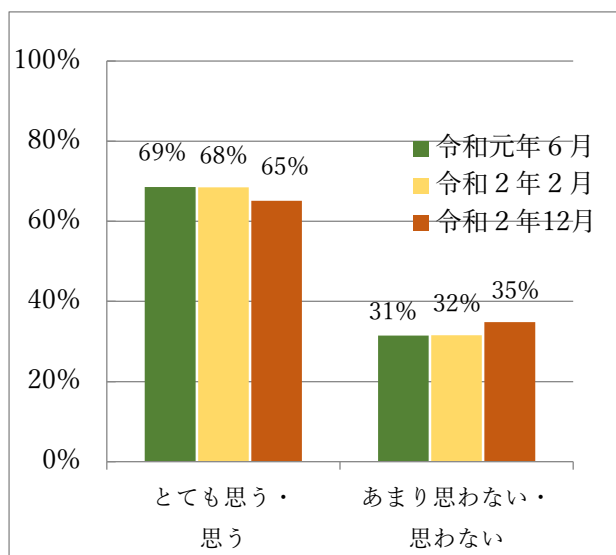


図5-3 自分にはよいところがあると思いますか

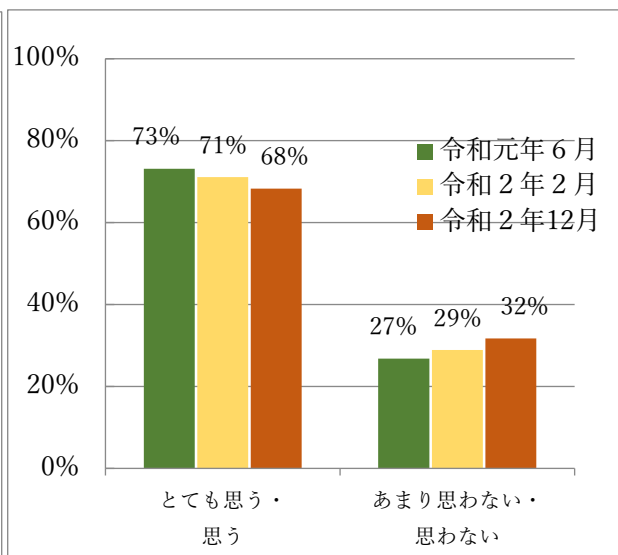


図5-4 人のことを考えて行動していますか

設問5 「友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか。」

図5-5のとおり、1ポイントの微増だったが、88.5%に増えた。設問1の「人と関わることが好きな」児童が多いこと、教師が児童の意見を価値付けして全体にフィードバックを心掛けてきたことが影響しているのではないかと考える。

設問6 「障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか。」

図5-6のとおり、5.5ポイントと一番増加した設問である。8割の児童が「とても思う・思う」と答えた。障害のある人との交流では、パラリンピアン、起業家、演奏家など様々な立場の人の講話を聞くことができたことや、生活科や総合的な学習の時間に交流活動や課題解決学習に取り組んできた成果と考える。また、設問2の「困っている人がいたら助けようと思う」との差が25ポイントから9ポイントに縮まったことから、障害のある人への偏見や不安感が少なくなったと考える。

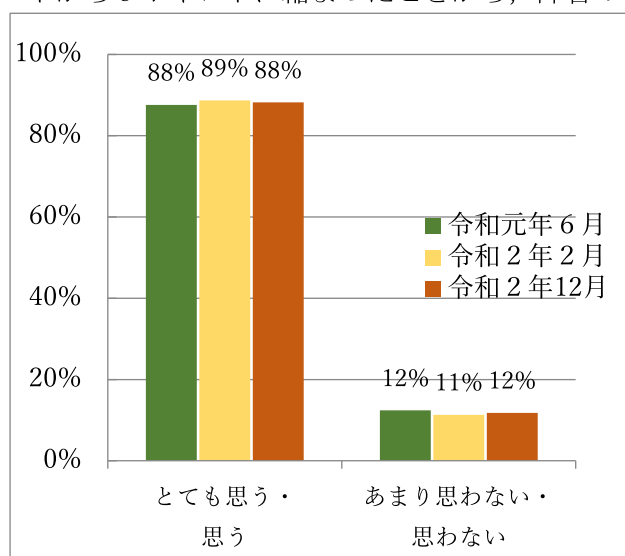


図5-5 友達と考えが違った時、友達の意見も認めることができますか

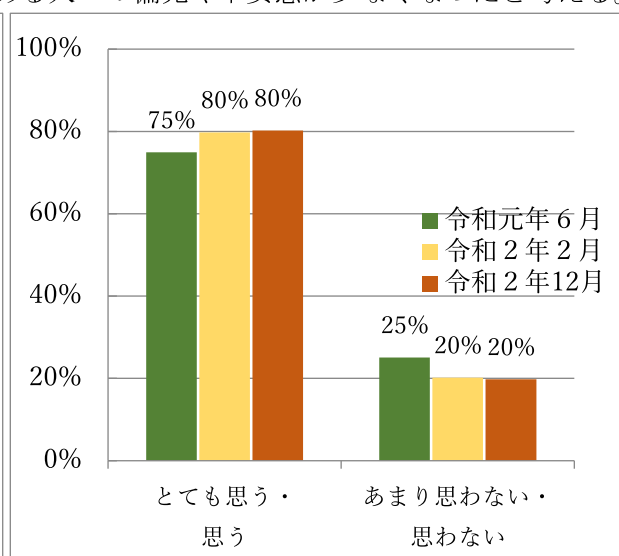


図5-6 障害のある人が困っていたら、声を掛けようと思いますか

2 記述回答の分析

さらに、児童発達段階に応じて、低学年（2年生）、中学年（4年生）、高学年（6年生）から1クラスずつ抽出して分析を行った。「障害のある人との交流（パラスポーツ体験や講話）から、どのようなことを思いましたか。」という設問について、児童が実際に書いた記述回答から、ポイントとなるキーワードを抜き出し、分類した。縦軸には「障害者理解の段階」（図1）に当てはめ、図6-1から図6-6のように、児童の理解が「気付く」から「考え、行動する」のどの段階にあるのかを表した。また、横軸には交流や体験をどれだけ他者との関わりの視点で捉えているのかを表した。数値が大きくなるほど「自己中心」から「他者との関わり」さらに「社会への視点」へと進んでいくとした。また、円の大きさは、同じ記述だった児童を児童数に対しての割合で表している。

1回目（6月）と2回目（12月）を比べると、どの学年も半年間の学習を通して、障害者理解の段階も、他者との関わりの視点も進んでいることが分かった。また、学年発達の観点から比較すると、学年が上がるにつれて、同様に段階が上がっていることが分かった。

(1) 2年1組の記述から

6月に比べ、変容の1番大きかった学年である。地域に住む特別支援学校に通う児童と学期に1回ずつ共に学習する複籍交流活動があったことで、様々な立場の人をより身近に感じることができたと思われる。また、2年生の後期ということでも、自分の思いを言葉で表す言語能力も急速に高くなっていく時期だということも一因であると考えられる。

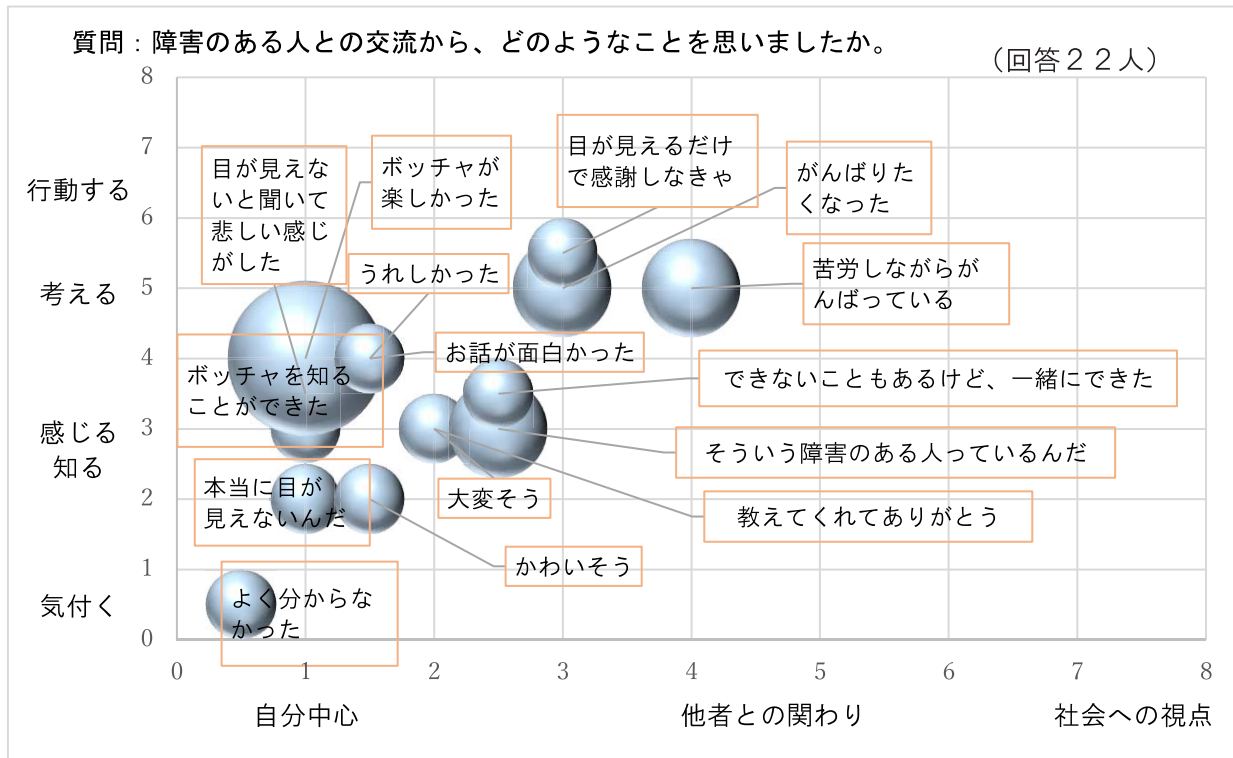


図6-1 令和元年6月実施

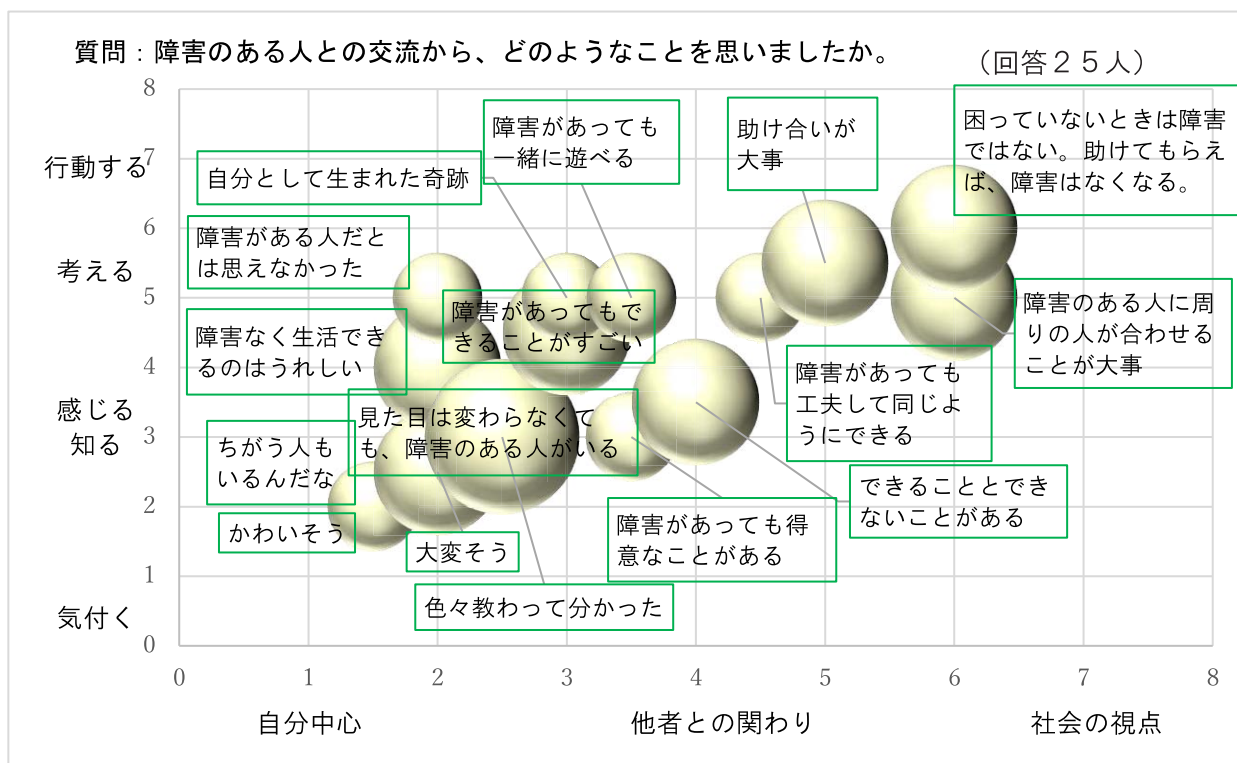


図6-2 令和元年12月実施

(2) 4年2組の記述から

6月は「障害者理解」にも「他者との関わり」についても、様々な段階の記述があったが、年間を通して「福祉」の学習に取り組んだことで、12月は自己中心的な意見はほとんど見られなくなった。また、車いす体験や点字体験、調べ学習を行うことで、障害のある方の対場に立った感想が多く見られるようになった。

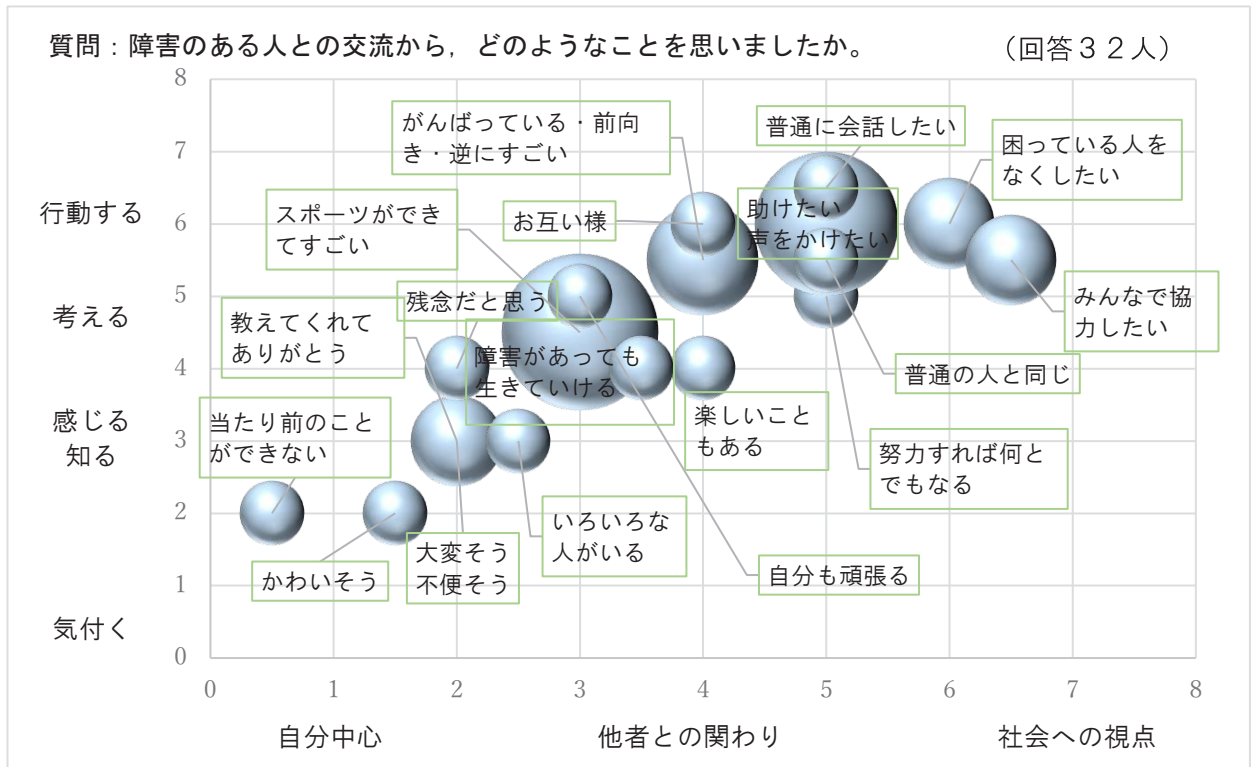


図6-3 令和元年6月実施

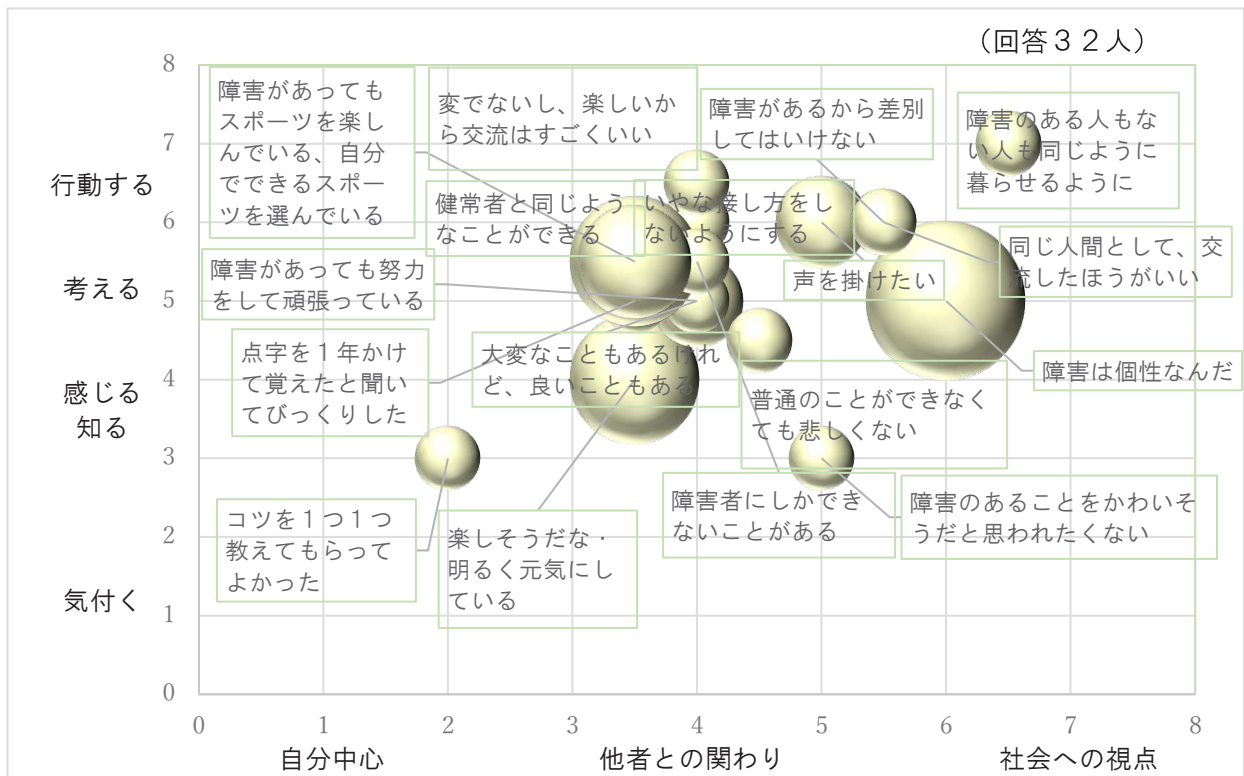


図6-4 令和元年12月実施

(3) 6年2組の記述から

6年生はこれまでの積み重ねがあることから、「障害者理解」も「他者との関わり」も、より高い段階の記述が多く見られた。「助け合ってもっとよい社会に」「差別のない世界にしたい」と、他者との関わりがより社会に向かっていく記述も見られるようになった。

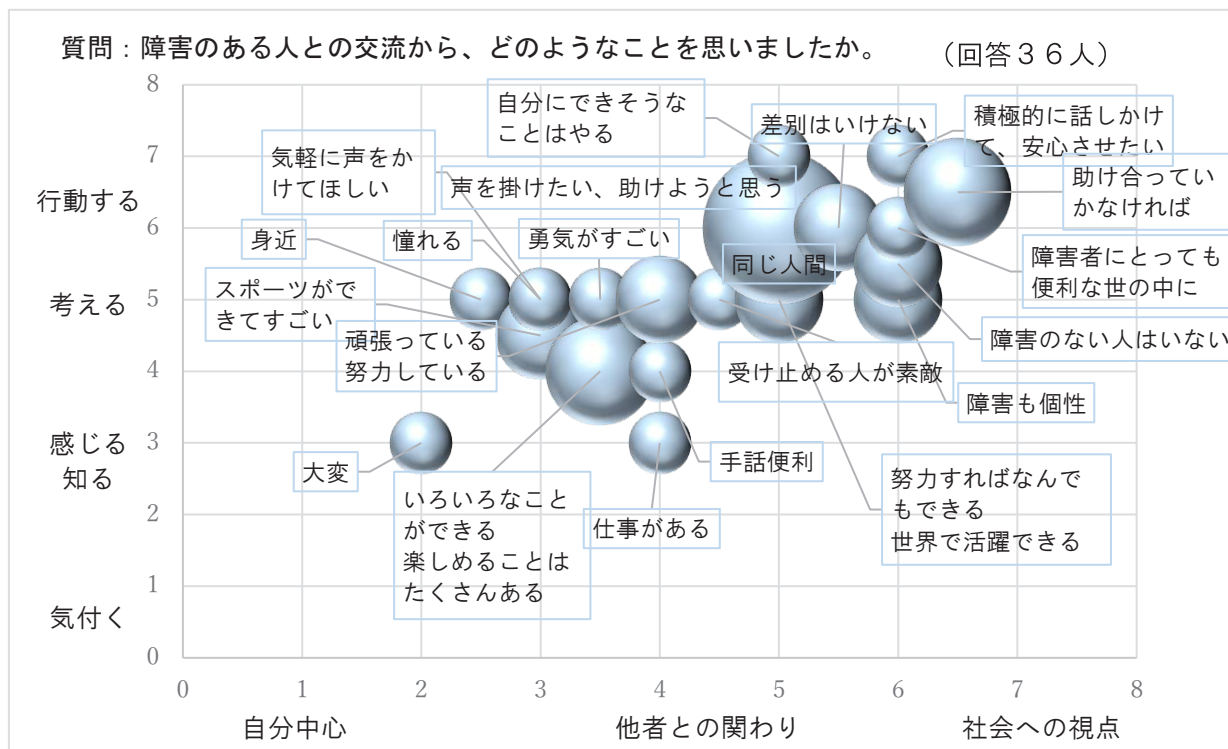


図6-5 令和元年6月実施

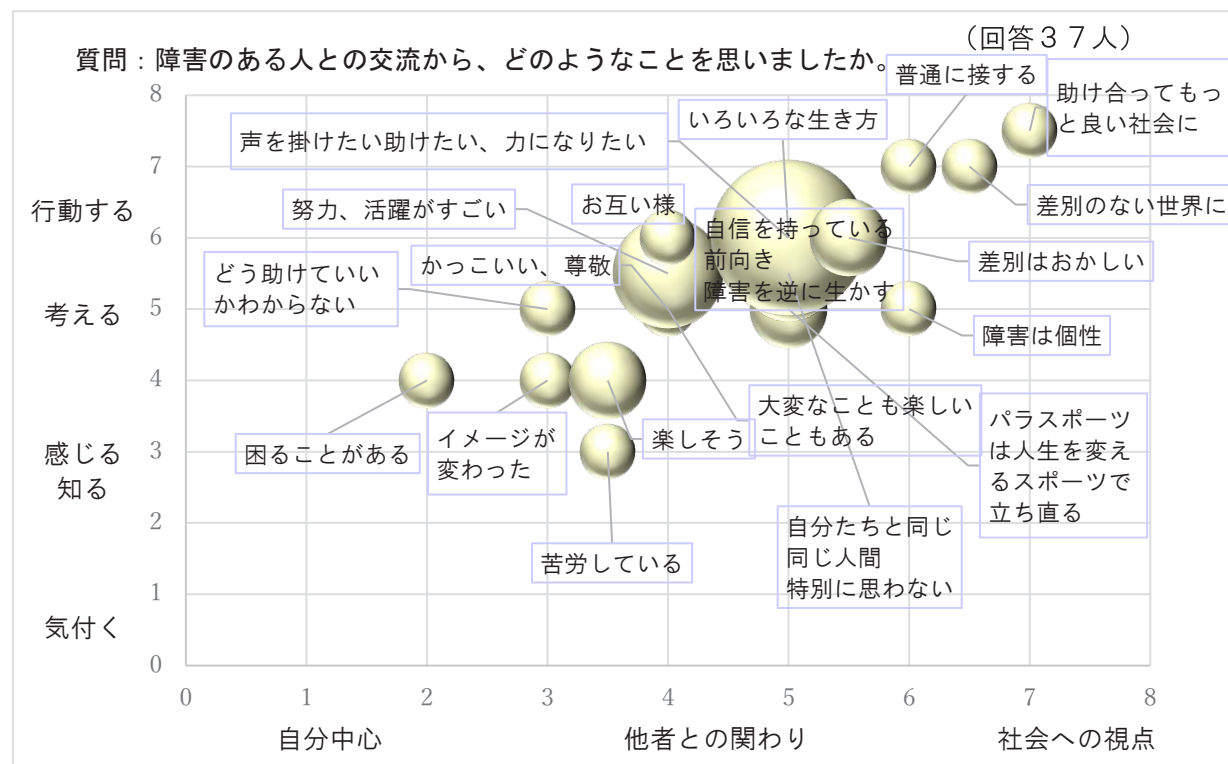


図6-6 令和元年12月実施

◇児童の記述例

- 「障害」というかべを自分たちをつくってはいけな
思った。
・障害のある人もない人もみんなおなじ人だと思った
- ・障害のある人もできることはたくさんあってそれを尊敬し
てあげたい。
・障害のある人が苦しいながら、がんばって生きて自分
にできることを見つけているということに感動した。
- 障害はかわいそうと受けとめる、でもまた
自分とはちがうんだなと理解すべきだ
と思った。だって人間一人一人ちがうから。
- みんな、障害のある人もない人も、ほかのちがう人も
同じ人も、などみんな差別や偏見がない社会に
しなければいけないと思った。

3 日常の言動からの気づき

教師が児童の変容を見取るため、日常の言動について記録に残していった。学校生活で周りの人を思いやる言動が見られただけでなく、学校外でも、多様な立場の人が困っていることに気づき、自分にできることを考えて行動に移していることが分かった。

(1) 学校生活

- ・道徳で「同じ地球で同じ空気を吸って生きているから、みんな平等で、みんな大切な存在」と発言していた。
- ・ずっと忘れ物をしていた児童がその日はすべて持ってきたことが分かり、クラスのみんなから拍手が起こった。
- ・町探検のインタビューで、障害がある方が利用しやすい工夫について質問していた。
- ・授業中、みんなが待っているのに気付かず自分のことをしている子に、優しく声を掛けていた。
- ・いつもけんかをしてしまう児童の「がんばりカード」をたまたま見かけてしまった児童が「がんばっているんだね、えらいな。」と言って理解を示していた。
- ・「おれ、いいところないし」とつぶやいていた児童に、「〇〇さん、優しいじゃん」と周りの児童が声を上げていた。
- ・通級教室のグループ学習で、相談して決める活動の時、友達の意見をきっぱりと否定するのではなく、優しく「うーん…」と言って反応していた。

(2) 日常生活から

- ・公園で遊んでいた時、通りがかりのおじいさんが杖を落としたのを見かけ、拾って渡した。
- ・道路の点字ブロックの上に置かれていた自転車をどかしておいた。
- ・白杖を持った人が困った様子だったから、「お困りですか」と声を掛けた。郵便局に行きたいと言っていたので、郵便局に連れて行った。
- ・横断歩道の前で、白杖をもっている人に勇気を出して「大丈夫ですか」と声を掛けた。

II 教師の変容

令和元年度に研究をスタートした時点では、オリンピック・パラリンピック教育アワード校やパラスポーツ競技応援校として、パラスポーツ体験や車いすバスケットボールの応援、また、障害のある人を講師に招いた道徳授業地区公開講座等の活動は実施していたが、特別な研究としては取り組んでおらず、手探りの状態であった。そこで自分たちが「障害者理解教育」について感じていること、疑問に思っていることを出し合うことから始め、研究の方向性を探った。2年間の研究の中で、パラスポーツや交流活動を積み重ねるごとに、児童の周りの人への意識や行動が変わっていくのを見取ることができるようになった。また、教師自身も障害のある方や多様な立場の方へ自然と関わることができるようになっていった。

1 研究スタート時の教師のアンケートから（令和元年5月実施）

- ・何をもって障害者というのか……。捉え方や環境の問題も大きい。
- ・そもそも障害を理解するということはどういうことか。
- ・なぜ障害者理解が必要なのかを子供たちがどう捉えているか。
- ・児童に分かりやすく伝えるにはどのように話したらよいか。
- ・小学校での障害者理解について。発達段階に応じた具体的な深め方は。
- ・障害者の理解の仕方を「こうあるべき」と押しつけることはできないと思う。どんなふうに理解し、どんな態度を取っていくのか考えるのは児童であり、そのための体験や少数派の存在を知る学習などを行っていくのが、学校や教員の役割ではないかと思う。
- ・子供たちの発達段階によって理解に差が生じること、また障害の方々との直接的な交流などの経験によっても異なってくると考える。偏見や差別をなくし、お互いを認め合えるためには、まず、自分の心の中にある偏見・差別的な気持ちや考えを認め、自分の心にあるものと向き合っていく必要があると考える。（例えば「怖い、近寄れない、気持ち悪いなどなど」）その思いを出さなければ真の理解にはつながっていかないのではないかと考える。その部分を指導の中でどのように取り上げていくかは大変難しい……。
- ・障害者理解のために子供に指導しているが、実生活で出会う障害者のイメージが子供の中で強いいため、単発の指導では難しいと感じている。
- ・障害者理解はCMなどの影響や体験する機会が増えたことで、社会的に意識がされるようになってきているが、大人も子供も障害者以前に他者への意識が薄いと感じる。電車に乗ってきたお年寄り、妊婦さんに気付かずに携帯ゲームや居眠り。他者へのアンテナを張っていくことが他者理解につながり、それが外国籍の人や障害のある人、高齢者への意識につながると思う。身近な人（隣の子）→少し周りの子（班の子）→クラスの子→学年の子→年下、年上の子→ → →というような広がりが必要だと思う。
- ・他者理解をするために自己理解が必要であると思うが、それをどのように結び付けていくか。
- ・みんなと同じようになかなかできない人からすると、理解が得られないのはとてもつらい。いろいろ説明しなければいけないこともしんどい。説明したら分かってもらえるとも限らない。

これがずっと続いていく。理解される環境、当たり前レベルが上がっていくことを望む。

- ・指導者として本人の実態把握が大切で、少しの工夫次第で変えられることもあると感じている。軽度の障害のある子供たちはたくさんいると思う。周りの人がさりげない配慮ができるようになればと思う。
- ・障害のある人との接点がある子とない子で、理解に差があると思う。毎年、様々なゲストティーチャーが来てくださってありがたい。差別はしてはいけない、助けてあげたいという優しい気持ちは子供たちがもっていると感じる。ただ、自分にできることは何かと一歩進んだところまでは難しい。
- ・障害者が他の人と平等に暮らすためにどのような合理的配慮が必要なのか。対応の仕方等を教えていただきたい。
- ・子供たちの中にも特別支援が必要な児童が多い中、いわゆる目に見えない障害である発達障害等について触れるべきか。触れるとしたらどのように触ればよいのか。
- ・健常者が障害者に対して、「助けてあげなきゃ」というような社会的弱者として見てしまうことがある。(対等でない。どこの部分で対等であるか。)上から視線になっていないか。
- ・障害者理解とボランティアマインドがあやふやになる。他人への思いやりは相手が健常者でも必要だと感じるが、相手が障害者だった場合、どのような行動が適切なのか迷いが残る。弱者に対するように思いやるのは心のバリアフリーとは言えないだろうし、具体的にどのようにするのがいいのか。
- ・障害のある方に、どう関わったらいいか、よく分からないところがある。手助けをしていいか、声を掛けてみるだけでいいのか……。「障害者理解」なので、こういうところが困りやすいとか、手助けが必要等を知ることではなく、最終的に「様々なハンディがあっても、皆安心して共生できる社会を考える」という大目的に目を向けていくということでのいいのか。
- ・発達障害は見た目もわからない上に、コミュニケーションの取りづらさもあり、困っていることを分かってもらうのも難しいと感じている人が多い。
- ・自閉症など、外見で分かりにくい障害について。突然の行動にびっくりすることがある。
- ・昨年度お話をしていただいた方々には、障害を乗り越え成功したエピソードが多く、聞いていて興味深く、楽しかったが、その他の方々についてはどう指導し、理解していけばいいのか。
- ・障害はあるが、ある分野で成功した人を含め、障害があることで苦労したこと、嫌な思いをしたこと等の負の内容の話も子供たちにもっとしてもらった方がいいのか……。障害のある方にどこまで突っ込んで話を聞いていいのか、どのようなスタンスで接したらいいのか。
- ・昨年度の「ボッチャ」の方の本音で、「体調に不安があり、オリンピックにも出られるかどうかその瞬間まで分からない。心状態によっても体調が大きく崩れることがある。」という言葉に驚いた。
- ・視覚障害者のための点字ブロックが肢体不自由者にとって、障害になることなど難しい。
- ・近所の全盲の方は本当に耳がよく、私が疲れている時は必ず「疲れているねえ」と必ず健康茶を飲ませてくれる。相手の声で気持ちや疲れている様子を見抜けてしまうのはすばらしい。

2 選択肢による意識調査

図7-1, 図7-2のとおり, 設問1, 2から, 障害者理解に対する教師の意識は高いと考える。「障害のある人が困っていた時の声掛けや手伝い」の設問が「よくある」が下がり, 「ない」が上がったのは, コロナ禍の影響で人と接することの制限があった影響かと思われる。

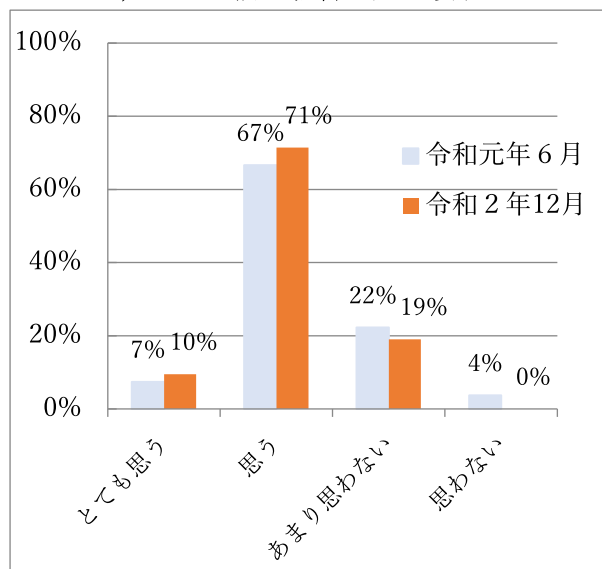


図7-1【設問1】学校以外で, 障害がのある人が困っていた時に声を掛けたり, 手伝ったりしたことがありますか。

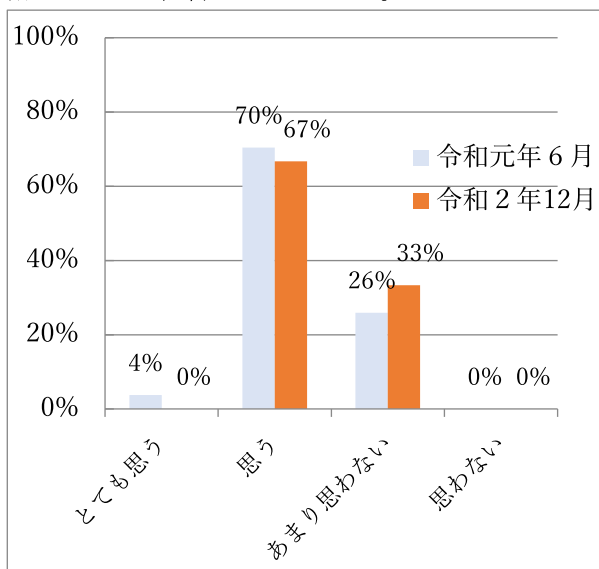


図7-2【設問2】障害のある人は, 社会で差別を受けていると思いますか。

図7-3のとおり, 設問3「障害者理解の教育は難しいと思いますか」に対して, 「とても思う」の回答は0になり, 「あまり思わない」の回答も6ポイント下がった。「思う」の回答は依然高く87%である。4年生は年間を通して福祉の学習に取り組むので, 学習の積み重ねがすぐに表れるが, 他の学年は取り組みの成果が出にくいことによると思われる。図7-4のとおり, 「障害者理解の取り組みは, 多様性を尊重する児童の育成につながっていると思いますか。」の設問については, 「とても思う」が9ポイント高くなり, 「あまり思わない」の回答は0になった。

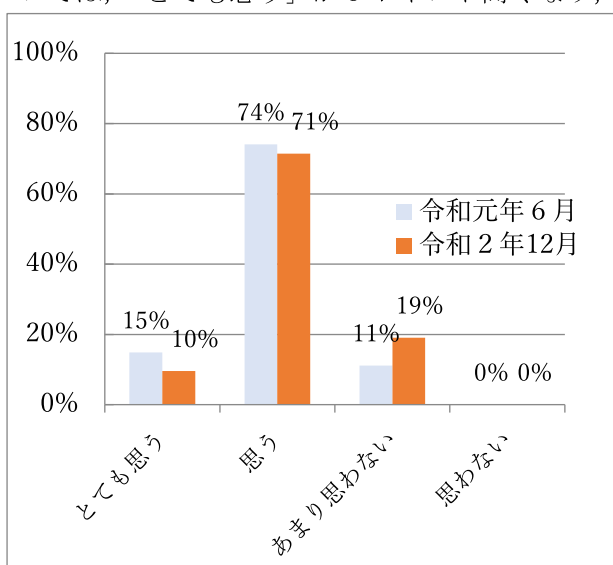


図7-3【設問3】障害理解の教育は, 指導が難しいと思いますか

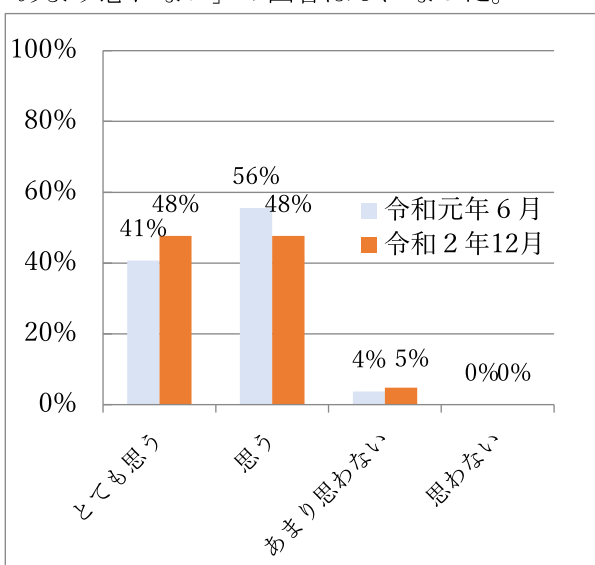


図7-4【設問4】障害者理解の取り組み(パラスポーツ体験や講話)は, 多様性を尊重する児童の育成につながっていると思いますか

3 日常の活動における変容

- ・学級活動で、「相手を思う気持ち」を育むために、「ありがとう」を教員も一緒にたくさん言うように心掛けた。
- ・一日の良かったことを毎日発表したり、友達の良いところを発表し合う機会を工夫したりするようになった。
- ・いろいろな機会を通して、「みんな一人一人違うんだね」と、個性の尊重につながる声掛けをしてきた。
- ・車いす利用者の方が自動販売機で飲み物を買おうとしていたのを見かけたとき、児童の「勇気を出して声を掛けた」の言葉を思い出し、「ボタンを押しましょうか」と、自然に声を掛けることができた。

III 成果と課題

1 成果

- ・障害者理解に関わる学校全体計画を立て、発達段階に応じた指導を行うことで、自分自身を含め、多様性を尊重する学習を積み重ねていくことができた。その結果、児童にもっとこうしたい、こうしなくてはという向上心の高まりが見られた。
- ・他教科との関連を図りながら指導を行うことで、自分自身や多様性の尊重に対する児童の見方や考え方が広がり、理解が深まっていくのを振り返りカードや発言から見取ることができた。
- ・様々な立場の方との交流や体験を重ねることにより、児童に障害のある人への偏見や戸惑いが少なくなり、休憩時間には出合いを楽しんだり、自分から積極的に話し掛けたりするなど、交流することを楽しむようになった。
- ・朝学習の時間（ぐるえんタイム）に、年間計画に基づいて自己理解・他者理解・友達関係作りに関わる活動に取り組むことで、困っている人を助けたり、自分ができることを考えられたりする姿が多く見られた。
- ・誰にでも得意なこと、不得意なことがあり、一人一人が違って当たり前なんだと児童に働き掛け、互いの人格を尊重し合うような人間関係を築いていく学級経営や専科経営が学校全体に浸透した。

2 課題

- ・自己理解を深めるには、児童の頑張った過程を認めることやそれぞれの児童の困難さに応じた指導をさらに丁寧にしていくことが大切である。学校での取組を家庭にも周知し、学校と家庭とが双方に連携をして取り組んでいくことも必要である。
- ・多様性を尊重し、互いを認め合っていくためには、低学年の頃から国語における言語化、道徳における心情理解の積み重ねが大切である。また、生活科や総合的な学習の時間の障害者理解に関わる単元作りもさらに工夫していきたい。
- ・障害者理解に関わる学習や活動で学んだこと、考えたことを児童が日常の生活で生かしていけるように、児童への声かけや実践したことへの価値付け、今後の継続した指導が必要である。

おわりに

研究推進委員長 主幹教諭 岩田 順子

研究当初は、障害者理解教育は必要であるということは頭では分かっているけれども、何からどう始めたらよいのか、ゴールはどこにあるのかという見通しが立たない状態でした。そこで、教職員にアンケートを取り、障害者理解について一人一人の声を集めることから始め、それらを基に研究の方向性を探っていきました。また、講演会や授業研究に来ていただいた講師の先生方からは、自分たちにはない視点からの助言をいただき、軌道修正を重ねてきました。

交流活動や体験学習を進める中で一番感じたことは、相手を理解するにはまず相手を知ることが基本であるということでした。様々な立場の方と交流することで、その方の置かれている状況や思いを直接見たり聞いたりすることができ、いろいろなことを感じ取ったり、次に何をしたらよいのかを考えたりすることができました。また、子供たちの声から気付かされることも多く、考え方の柔軟さや感受性の豊かさに驚かされると同時に、こちらが学ぶことがたくさんありました。

研究1年目のまとめの時期に新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための臨時休業があり、2年目に入っても予定していた交流活動がほとんどできない状態となりました。ただ、そのような状況でも子供たちとの交流を楽しみに来てくださる方々と少しずつ交流活動を再開し、学習につなげることができました。社会には予想もつかないことが起こるということ、その中で私たちは誰もがお互いを思いやり、助け合っていくことが大切であるということをお子も私達も身をもって感じました。

2年間の障害者理解教育を通して、障害や障害者の方を理解するということは、自分や周りの人を理解することと同じだということを実感しています。今後は、研究で培ったことを日々の生活や学習に生かしていけるよう、歩を進めていきたいと思えます。

